海外豆類事情調査報告書
（タイ）

チェンマイ：ワット・トン・グウェン

令和２年５月

公益財団法人　日本豆類協会

ご挨拶

海外豆類事情調査につきましては、平成８年から毎年、関係国における豆類の生産・流通・消費の状況を始め、農業、食料、社会、経済などの動向を実地で調査して参考となる情報を収集し、豆類関係業界の関係者の皆様にご提供させていただいております。

今回は、タイを調査対象国として選定し、令和 2 年 2 月 16 日から 2 月 23 日までの日程で現地調査を実施いたしました。タイでは北部、東北部、中部などで大豆、落花生、ササゲ・インゲン類をはじめ、多くの豆類が生産されていますが、これらの多くは基本的には国内市場向けであり、日本には、竹小豆、いんげん、ささげ等の乾燥豆や加糖餡が輸出されているものの、量的には限られています。その一方で、ここ数年においてはタイの小豆の生産・流通の状況に変化があるとの情報もあります。

こうした状況を踏まえ、タイにおける主要生産地を実際に訪問し、豆類の生産、流通、消費等に関する事情調査を行い、我が国への今後の豆類の供給力等について分析を行うことは、我が国の雑豆の需給安定、消費の拡大のための方策を検討するに当たっても大変有用であると考えます。

本調査の実施に当たり、（一社）全国豆類振興会にご支援いただくとともに、現地との日程調整等には、関係者の方々に大変お世話になりました。ここに厚く御礼申し上げる次第であります。

調査期間中は、幸い天候にも恵まれ、無事調査を終え、所期の目的を達成することができましたことは、現地関係者のご協力並びに調査団員一同のご尽力によるものと深く感謝いたします。

令和 2 年 5 月

公益財団法人　日本豆類協会理事長
内田　和幸

目次

はじめに 1
調査団員名簿 2
調査日程 3
調査経路図 4

Ⅰ　タイの農業及び豆類生産の概要

1　タイの一般概況 5
2　農業の概観 6
3　タイの豆類生産の概要 8
4　タイの豆類流通状況 21
5　タイの豆類消費状況 22
6　タイの豆類貿易状況 24
7　タイと日本との豆類に関する貿易関係 29

Ⅱ　主な訪問先での調査概要

1　２月１７日（月）（バンコク）
・農業協同組合省農業普及局 31
・JETRO バンコク事務所
・在タイ日本国大使館

2　２月１８日（火）（バンコク）
・タラート・タイ市場 33
・オートーコー市場
・タイ国トウモロコシ及び農産物取引協会
・ビッグＣスーパーマーケット

3　２月１９日（水）（チェンマイ）
・チェンマイ畑作センター 37
・王室プロジェクト財団ショップ

4　２月２０日（木）（チェンマイ）
・ムアン・マイ市場 40
・王室プロジェクト財団：パンダ農業ステーション
・大豆農家

5　２月２１日（金）（チェンマイ）
・王室プロジェクト財団：農産物集出荷場 45
・民間豆類流通販売業者（LIMSAKDAKUL）

Ⅲ　調査後の感想 48

Ⅳ　付属資料 49

はじめに

今回は、5名のメンバーで令和2年2月16日から2月23日までの全行程8日間、行き帰りの移動期間を除くと実質6日間の日程でタイの現地調査を実施してまいりました。タイへの調査団派遣については、平成20年7月に実施して以来の凡そ10年ぶりのこととなります。

なお、今回は、日本国内で豆類事業を展開する流通・実需・輸入・生産の各分野の代表者に公益法人日本豆類協会担当者を加えた合計5名で調査団を結成し、バンコクとチェンマイの2か所で現地調査を実施しました。

バンコクでは、農業協同組合省農業普及局を訪ねてタイにおける豆類の生産状況とその政策についての説明を受け、タラート・タイ卸売市場等では豆類の流通状況を調査しました。さらに、タイ国の主要な農産物流通業者と会合を持ち、タイで生産されているインゲン、小豆、竹小豆等の輸出を含む取引実態に関して説明を受けるとともに意見交換を行いました。

その後、雑豆の主要生産地であるタイ東北部のチェンマイに移動して、農業協同組合省農業局傘下のチェンマイ畑作センターにおいて、インゲンと小豆の遺伝資源保全のための栽培状況等を調査するとともに、王室プロジェクト財団が少数民族の貧困対策のために実施しているインゲンと小豆の試験研究、技術普及、流通・加工・販売等の取組についても調査しました。また、チェンマイにおける有力な雑豆流通業者を訪れ、当該地域におけるインゲン、小豆、竹小豆等の生産及び流通の実態についての話を聞き意見交換を行いました。

今回の調査を通じて、タイにおける雑豆の生産・流通の近年の情勢、今後の可能性等について一定の情報を得ることができたと考えております。もちろん本調査報告ではまだまだ十分ではありませんが、我が国の雑豆関係者が日頃の業務を行われるうえで何らかの参考になれば、これほど嬉しいことはありません。

最後になりましたが、調査期間中、団員も体調を崩すことなく、無事調査を終えることができましたことは、現地関係者のご協力、団員一同のご尽力によるものと深く感謝いたします。

令和２年５月

タイ豆類事情調査団長　　梶原 雅仁

調査団員名簿

団長 (流通)梶原雅仁
全国穀物商協同組合連合会 常務理事
（株）丸勝 代表取締役社長

副団長(実需)光武信雄
全国甘納豆組合連合会 副会長
光武製菓株式会社 代表取締役会長

団員(貿易)永田大輔
雑穀輸入協議会
日昌物産株式会社

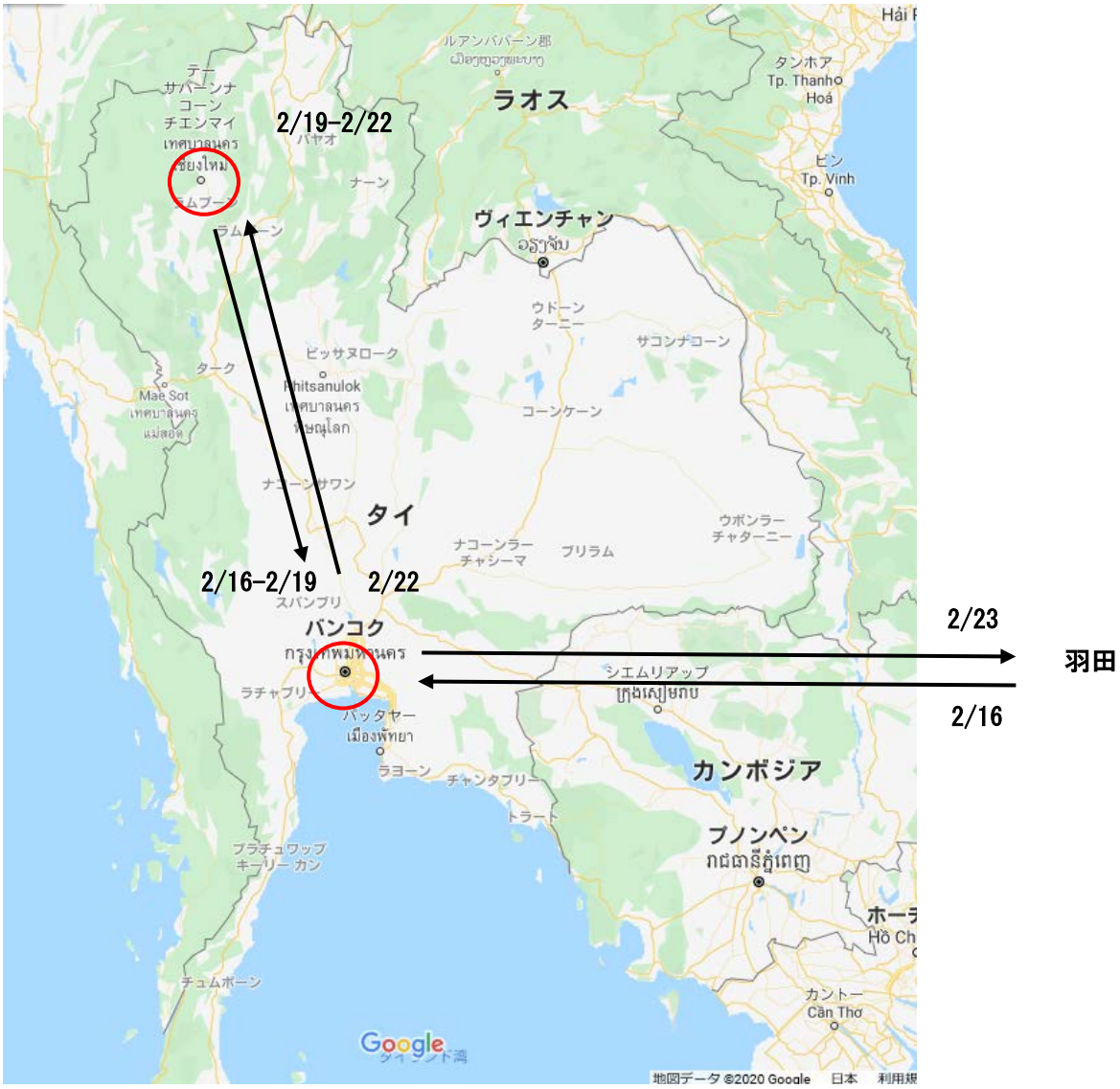
団員(生産)本郷　徹
ホクレン農業協同組合連合会
農産事業本部 農産部雑穀課長

団員(事務局)飯田健雄
公益財団法人日本豆類協会
企画調査部長

調査日程

日程	場所	交通手段	時刻	活動	宿泊
2 月 16 日（日）	羽田 バンコク	航空便	午前	羽田発　→	
			午後	バンコク着	バンコク
2 月 17 日（月）	バンコク	専用バス	午前	農業協同組合省農業普及局	
			午後	JETRO バンコク事務所	
				在タイ日本大使館	バンコク
2 月 18 日（火）	バンコク	専用バス	午前	トウモロコシ及び農産物取引協会	
			午後	タラート･タイ卸売市場	
				BIG C スーパーマーケット	
				オートーコー市場	バンコク
2 月 19 日（水）	バンコク	航空便	午前	バンコク発→チェンマイ着	
	チェンマイ（市内）	バン *3	午後	チェンマイ畑作物研究センター	
				王室プロジェクト財団ショップ	チェンマイ
2 月 20 日（木）	チェンマイ（市内） チェンマイ(周辺生産地内)	バン	5:00	ムアン･マイ（ニュー・シティ）市場	
			午前	王室プロジェクト財団 パン･ダ農業ステーション（チェンマイ市街から 50 キロ）	
			午後	パン･ダ農業ステーション周辺の豆栽培農家訪問 （16 時発、17 時半チェンマイ着）	チェンマイ
2 月 21 日（金）	チェンマイ(周辺生産地内)	バン	午前	王室プロジェクト財団：農産物集出荷場	
			午後	民間農産物加工所 (LIMSAKDAKUL)	チェンマイ
2 月 22 日（土）	チェンマイ バンコク	航空便 バン	午前	チェンマイ発　→　バンコク着	
	バンコク	バン 航空便	午後	市内視察 バンコク発	機内泊
2 月 23 日（日）	羽田着			羽田着	

調査経路図


ラオス
ヴィエンチャン
タイ
バンコク
カンボジア
プノンペン
2/19-2/22
2/16-2/19
2/22
2/23
羽田
2/16
Google
地図データ ©2020 Google

Ⅰ　タイの農業及び豆類生産の概要

１　タイの一般概況

（１）自然、経済等

タイは、東南アジアの中心に位置し、国土面積は約 51 万 4,000 平方キロメートル（日本の約 1.4 倍）で、ミャンマー（ビルマ）、ラオス、カンボジア、マレーシアと国境を接している。

また、タイは熱帯性気候に属し、年間の平均気温は約 29℃、バンコクでは一番暑い 4 月の平均気温が 35℃、一番涼しい 12 月の平均気温が 17℃になり、季節は 11 月～2 月の乾期、3 月～5 月の暑期、6 月～10 月のグリーン･シーズン（雨期）の三つに分かれる。

人口は、6,903.8 万人(2017 年、国連推計)であり、在留邦人の数も 7,000 人程度にのぼる伝統的な親日国である。

タイは、1967 年に結成時の東南アジア諸国連合（ASEAN）に加盟し、日本や欧米諸国の大企業の進出を背景にして高度経済成長を遂げてきた。1997 年のアジア通貨危機に直面した際には、一時的に経済は停滞したものの、その後は急激な回復を見せ、現在では再び高い経済成長率を維持して東南アジアにおける代表的な工業国としての立場を保ち続けている。

表 1　タイの経済概要

年	2012	2013	2014	2015	2016	2017
GDP 成長率	6.4	8	7.4	3	3.3	3.9
一人当り GDP（ドル）	5,587	5,976	5,714	6,106	6,245	6,878
物価上昇率（%）	3	2.2	1.9	△0.9	02	0.7
失業率（%）	0.7	0.7	0.5	0.9	1	1.2

（公財）国際労働財団資料

（２）貿易関係

タイは東南アジアの中で先駆けて経済発展を遂げた国であり、他国との貿易額も多額にのぼり、輸出総額は 2,500 億ドル、輸入総額は 2,300 億ドルとなっている。なお、輸出・輸入ともにその相手国の上位は、中国、米国、日本の三国が占めている。

主な貿易品目としては、輸出品目が、自動車、コンピュータ、機械器具、食料加工品となり、輸入品が機械器具、原油、電子部品となっている。

表２　タイの貿易概況

輸出	総額	2,522 億ドル（2018 年）
	品目	自動車，コンピュータ・同部品，機械器具，農作物，食料加工品
	相手国	1.中国（12.0%）2.米国（11.1%）3.日本（9.9%）
輸入	総額	2,298 億ドル（2018 年）
	品目	機械器具，原油，電子部品
	相手国	1.中国（20.1%）2.日本（14.2%）3.米国（6.0%）

外務省資料より

日本とタイとの貿易関係をみてみると、タイの日本への輸出は 2 兆円台、タイの日本からの輸入は 3 兆円台となっており、ここ 10 年以上に渡って概ね同様の範囲で推移している。

なお、タイから日本へ輸出されている主な品目は、天然ゴム、自動車・同部品、コンピュータ・同部品であり、タイが日本から輸入している主な品目は、機械・機械部品，鉄・鉄鋼、自動車部品となっている。

表３　タイと日本の貿易関係　　億円

	2014 年	2015 年	2016 年	2017 年	2018 年
輸出（タイから日本へ）	22,995	24,711	21,896	25,502	27,707
輸入（タイが日本から）	33,198	33,870	29,744	33,004	35,625

外務省資料より

２　農業の概観

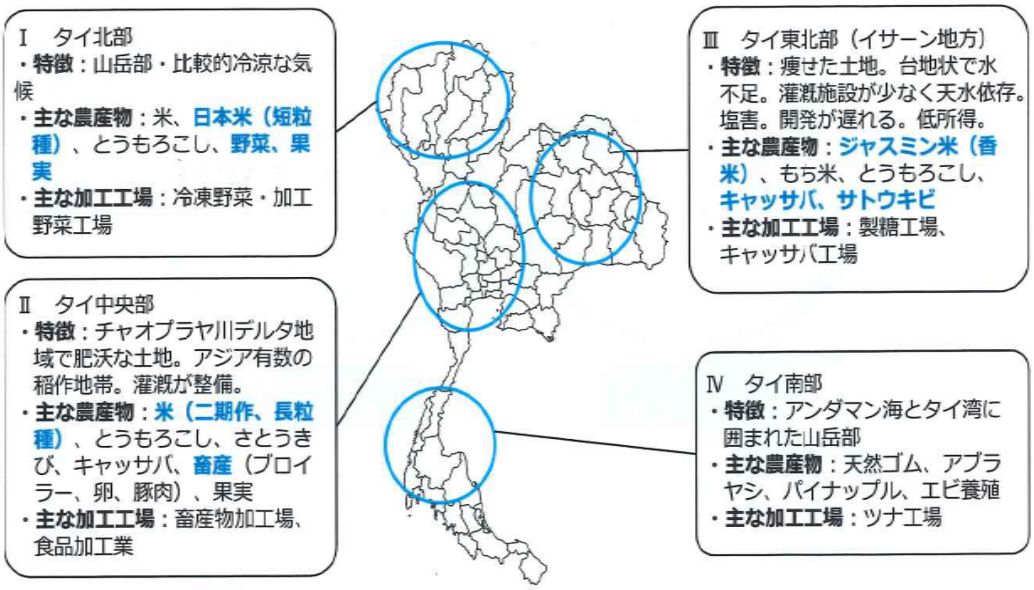
タイではコメが最重要な農産物であり、世界のコメ市場における主要な輸出国の 1 つに数えられている。コメは国土面積の 20%に相当する 1,100 万ヘクタールで栽培されているほか、サトウキビ、キャッサバが 100 万ヘクタール規模で栽培されている。パーム油の作付面積も 50 万ヘクタールを超えている。その他、比較的多く生産される他の農産物としては、天然ゴム、穀物、砂糖などが挙げられる。なお、タイ北部ではコーヒー、豆類が生産されている。

また、タイの農産物の需給、物流、価格形成には基本的に政府が関与することなく、市場メカニズムに委ねられている。但し、コメ、サトウキビ、キャッサバ及びパーム油等主要農産物については、価格安定のため政府が市場介入を行っている。

一方、タイ農業の構造的側面をみてみると、農業の占める GDP は全産業の約 12%に過ぎないが、就業者数は約 40%も占めている。これは、製造業が GDP 比では約 34%なのに、就業者では約 15%しか占めていないことと対照的である。また、農地面積は約 23 万 8,000 平方キロメートル（2,400 万ヘクタール）であり、農家世帯数は約 590 万世帯、世帯あたり農地面積は 約 4 ヘクタールとなっている。

農業生産量（2015 年）については、コメ：2,705 万トン（雨季作米：2,300 万トン、乾季作米：405 万トン）、トウモロコシ：461 万トン、キャッサバ：3,181 万トンとなっている。

タイの地域別の農業状況



ジェトロバンコク事務所作成

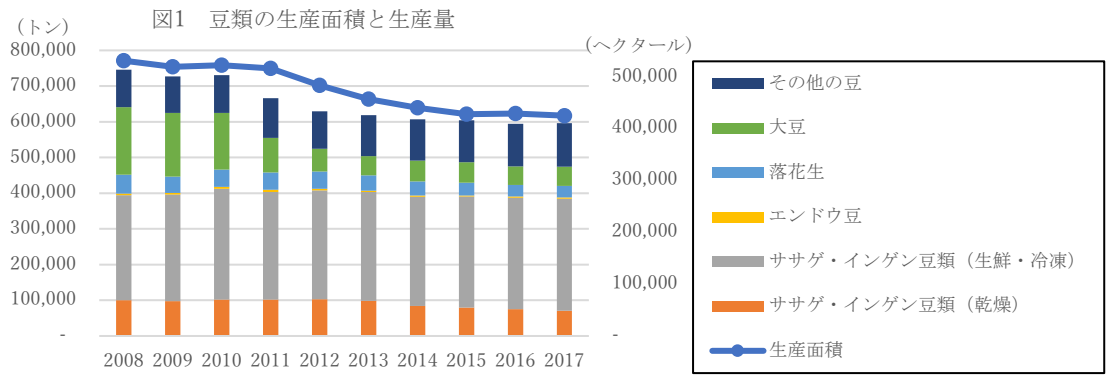
３　タイの豆類生産の概要

（１）概観

タイでは北部、東北部、中部などで大豆、落花生、ササゲ・インゲン類をはじめ、多くの豆類が生産されている。これらの多くは国内市場向けであり、米、トウモロコシ、キャッサバ、サトウキビなどの主要作物に比べて生産量は少なく、米やトウモロコシと輪作で栽培する農家が多い。

タイでは豆類の生産や消費に関する統一した統計が存在しないことから、豆類全体の需給状況の把握は難しい。世界食糧機関（FAO）の統計情報によると、2017 年の大豆、落花生、エンドウ豆、ササゲ・インゲン豆類、その他の豆類の合計生産面積は約 40 万ヘクタールで、生産量は約 60 万トンである。

下記の統計情報によると、タイでの豆類の生産面積及び生産量は減少傾向にある。10 年前の 2008 年と比較すると、特に大豆の生産が大きく減少していることが分かる。収量は、豆類全体としては大きな変化は見られない。



出所：FAOSTAT のデータより作成

表４　豆類収量　　（キロ／ヘクタール）

	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
ササゲ・インゲン豆類（乾燥）	741	716	723	764	763	763	763	764	764	764
ササゲ・インゲン豆類（生鮮・冷凍））	1,881	1,921	1,857	1,765	1,773	1,773	1,791	1,891	1,869	1,883
落花生	1,623	1,589	1,584	1,589	1,617	1,662	1,677	1,671	1,067	1,067
大豆	1,618	1,669	1,770	1,084	1,290	1,731	1,662	1,664	1,733	1,742
その他の豆	1,180	1,131	1,141	1,220	1,094	1,174	1,158	1,158	1,170	1,177

出所：FAOSTAT のデータより作成

また、FAO の統計情報によると、2013 年のタイにおける各豆類の需給バランスは以下のようになる。豆類の国内消費の中で大きな割合を占める大豆の生産量は国内需要の 1 割しか満たしておらず、輸入依存度が高い。一方で、ササゲ・インゲン豆類は国内供給量の相当部分を国産で賄っていると考えられる。

表５　タイ豆類食糧需給表（2013 年）　（トン）

	生産量	輸入量	輸出量	国内供給量	国内消費量				損失
					播種用	加工用	食用	その他	
エンドウ豆	-	9,702	34	9,668	-	-	9,377	-	291
ササゲ・インゲン豆類	105,000	29,404	36,363	98,041	9,000	-	85,009	-	4,032
落花生	32,980	68,880	5,172	96,608	2,310	52,981	39,470	-	1,847
大豆	190,000	1,682,395	12,276	1,860,120	2,725	1,427,580	142,851	193,530	93,434
その他の豆	115,000	33,196	4,998	143,198	5,050	-	133,955	-	4,193
合計	442,980	1,823,577	58,843	2,207,635	19,085	1,480,561	410,662	193,530	103,797

出所：FAOSTAT のデータより作成

（２）豆類に関する政策

タイでは多くの種類の豆が生産されているが、米、天然ゴム、キャッサバ、サトウキビなどの主要農産物と比べると生産、市場規模は小さい。特に雑豆類は、王室プロジェクト財団による研究開発や生産者支援はあるが、農業政策上の重要度は高いとは言えない。

タイ政府は 12 回目の 5 か年計画となる第 12 次国家経済社会開発計画（2017 年～21 年）を策定しており、農業分野には農業開発計画（2017 年～2021 年）がある。同計画では、革新的な技術の開発や導入、市場志向型の生産、サプライチェーンの強化などが指針として挙げられているが、主要農産物が主な対象になっており、マイナーな作物である雑豆類への影響は限定的だと考えられる。豆類の中で開発対象となっているのは、特に加工産業から需要の高い大豆や落花生ぐらいである。

タイでは補助金制度や集約的な農業の推進により、米、天然ゴム、キャッサバ、サトウキビなどの主要農作物に生産が集中する傾向がある。こうした農業のモノカルチャー化の影響で豆類の生産が減り隣国からの輸入が増えていくことも危惧される。雑豆については、主要農産物の裏作として比較的容易に栽培できることや、規模は大きくはないが安定した国内需要があることなどから引き続き安定した生産が見込まれるが、長期的に生産が減少していく可能性はあるだろう。本調査での関係者からの聞き取りでは、豆類の栽培は他の畑作物に比べて管理上の負担が大きく、政策的な支援も少ないことから、農家にとって豆類栽培の魅力が低いとの見解も聞かれた。

（3）タイの豆類の生産状況

タイでは多くの種類の豆が生産されているが、米、天然ゴム、キャッサバ、サトウキビなどの主要農産物と比べると生産、市場規模は小さい。特に雑豆類は、王室プロジェクト財団による研究開発や生産者支援はあるが、農業政策上の重要度は高いとは言えない。

タイでは多くの豆類がされているが、農業協同組合省農業普及局の統計では以下の 11 種類に分類されている。

①緑豆（Mung Bean)、②ケツルアズキ（Black Mung Bean)、
③黒インゲン豆（Black Bean)、④ササゲ（Cowpea)、⑤竹小豆（Rice Bean)、
⑥バンバラ豆(Bambara Groundnut)、⑦インゲン豆(Kidney Bean、Bush Bean)、
⑧落花生(Peanut)、⑨枝豆(Vegetable Soybean)、⑩サチャインチ(Inca Peanut)、
⑪その他の豆（Other Beans)

各豆類の栽培農家数、作付面積、生産量、収量、価格に関する統計データは公表されており、次項にまとめる。種類別では緑豆の生産が大きな割合を占め、2016 年は生産量の約 6 割を占めた。ただし、農業普及局の生産情報は、農家から行政機関への報告に基づいており、小規模栽培農家の生産情報などが洩れていることに留意する必要がある。特に竹小豆やササゲのように、行政機関からは何の支援も得られず、山岳地帯の小農が主な生産者である場合、本統計の数字は実態の数字とかけ離れている可能性が高いと思われる（実態の数字はもっと高いと思われる。)。

一方、タイでは自家消費および土地の肥沃度回復のための緑肥として豆類を栽培する農家が多く、収穫されない栽培地域も多い。また、雑豆類の多くは、主要農作物の裏作としての栽培が多く、農家はできるだけ手間や費用をかけずに栽培しているようだ。栽培農家によっては卸売業者から種子の提供や栽培技術指導を受けるところもあり、王室プロジェクト財団と提携している農家は財団の農業ステーションから種子の提供や技術支援を受けている。

表 6　豆類情報（2016 年）

	緑豆	ケツルアズキ	黒インゲン豆	ササゲ	竹小豆	バンバラ豆	インゲン豆	落花生	枝豆	サチャインチ	その他の豆
	Mung *1 Bean	Black Mung Bean	Black Bean	Cowpea	Rice Bean	Bambarra Groundnut	Kidney Bean/Bush Bean	Peanut	Vegetable Soybean	Inca peanut	Other Beans
栽培県数	39	11	4	3	4	5	6	53	13	15	22
栽培農家数	48,836	4,433	1,197	460	483	285	1,563	20,055	1,911	223	1,319
作付面積（ヘクタール）	80,309	6,533	1,403	70	1,090	47	2,568	8,307	2,208	110	1,045
生産量（トン）	91,233	6,166	1,071	119	934	88	4,116	23,886	25,265	365	1,326
収量（キロ／ヘクタール）*2	2,119	28,975	794	1,781	1,444	3,513	1,799	5,135	12,494	5,769	1,750
平均価格（バーツ／キロ）	27.00	28.67	28.26	23.49	28.64	26.60	23.19	23.98	14.34	34.06	26.10
平均価格（円／キロ）*3	92	97	96	80	97	90	79	80	49	116	89

出所：The Database of Field Crop Production in Thailand 2016

＊1：各豆の区分は農業普及局の統計データの区分

＊2：作付面積のうち収穫されない栽培地もあるため、必ずしも生産量を作付面積で割った値にはなっていない

＊3：1 バーツ＝3.4 円

（４）種類別豆類の生産状況

以下、タイでの主な雑豆の生産情報を記す。

１）緑豆　(Mung Beans)

緑豆はタイ全土で広く栽培されており、特に中部、北部での生産量が多い。緑豆の収穫期は 4 月～5 月（第 1 期）と 11 月～1 月（第 2 期）に分けられ、農業普及局の統計によると 2016 年の生産量は第 1 期と第 2 期の合計で約 9 万 1,200 トンである。県別ではスコタイ（中部）、ペチャブン（東北部）、ナコンサワン（中部）などで生産量が多い。なお、緑豆は農家によっては緑肥として播種されることが多いことから、栽培面積や収穫量に関するデータのとり方や扱い方が地域によって異なり、その結果として収量に大幅なバラツキが生じている可能性がある。

緑豆は、一般に甘く煮て餡にして菓子の原料となるなど、タイ人に人気がある。

タイのスーパーで販売されていた緑豆

表 7　緑豆生産状況（第 1 収穫期）（2016 年）

県	作付面積 (ha)	収穫面積 (ha)	生産量 (ton)	収量 (Kg/ha)	価格 (THB/Kg)	価格 (円/Kg)
スコタイ（中部）	7,098	6,548	6,332	967	25.44	87
ペチャブン（東北部）	6,479	96	6,188	64,461	27.33	93
ナコンサワン（中部）	6,254	2,704	12,220	4,519	32.19	109
ピチット（中部）	1,514	2	2,295	1,434,656	29.86	102
ロッブリ（中部）	1,102	222	1,197	5,384	22.93	78
ウタイタニ（中部）	852	409	518	1,268	34.71	118
ターク（北部）	820	17	917	54,558	23.14	79
パヤオ（北部）	742	410	1,927	4,702	22.36	76
チャイナート（中部）	543	540	1,328	2,458	9.85	33
プレー（北部）	278	129	126	977	24.12	82
ウタラディット（中部）	259	39	613	15,849	24.79	84
ピサヌローク（中部）	50	34	72	2,109	16.83	57
シンブリ（中部）	20	20	39	1,950	41.00	139
アユタヤ（中部）	17	17	6	336	32.86	112
ソンクラー（南部）	2	2	6	2,500	55.00	187
その他	137	-	124	-	-	-
合計	**26,167**	**11,188**	**33,908**	**3,031**	**27.72**	**94**

表 8　緑豆生産状況（第 2 収穫期）（2016 年）

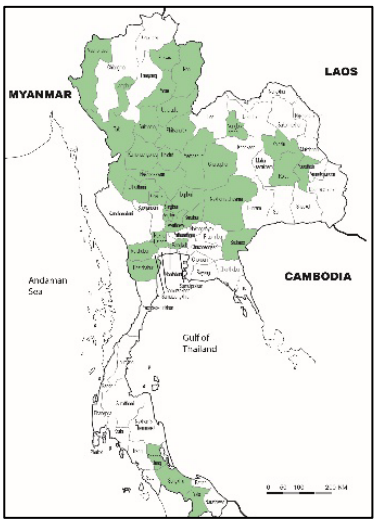
県	作付面積 (ha)	収穫面積 (ha)	生産量 (ton)	収量 (Kg/ha)	価格 (THB/Kg)	価格 (円/Kg)
ペチャブン（東北部）	10,749	10,756	8,760	814	28.89	98
ピチット（中部）	9,527	9,216	14,123	1,532	18.58	63
ナコンサワン（中部）	8,811	8,298	12,963	1,562	25.03	85
ウタイタニ（中部）	5,428	4,340	6,333	1,459	38.28	130
カンペンペット（中部）	5,127	3,516	2,882	820	22.73	77
チャイナート（中部）	3,813	3,332	2,828	849	22.95	78
スコタイ（中部）	2,950	2,902	2,712	935	25.78	88
シーサケット（東北部）	1,545	1,053	85	81	23.48	80
スパンブリ（中部）	1,182	377	615	1,631	24.35	83
ピサヌローク（中部）	1,093	1,093	1,344	1,230	22.92	78
ロッブリ（中部）	1,157	1,157	901	778	25.77	88
プレー（北部）	503	490	401	819	45.24	154
アユタヤ（中部）	430	13	259	20,261	37.28	127
シンブリ（中部）	399	113	236	2,092	39.19	133
タック（北部）	309	138	354	2,571	24.87	85
スリン（東北部）	229	91	85	926	49.79	169
ランパン（北部）	170	170	198	1,165	32.37	110
アントン（中部）	165	126	248	1,976	23.06	78
パヤオ（北部）	146	137	173	1,266	30.29	103
チャヤプーン（東北部）	104	83	299	3,613	16.31	55
サケオ（東部）	102	70	110	1,563	26.95	92
ナーン（北部）	94	3	67	26,234	24.44	83
コンケン（東北部）	61	52	52	1,001	16.88	57
ナコンラチャシマ（東北部）	57	52	266	5,142	11.18	38
ウタラディット（中部）	35	13	74	5,813	8.66	29
ノンブアランプー（東北部）	29	29	42	1,442	22.05	75
ナコンパノム（東北部）	29	29	22	750	100.00	340
バンコク（中部）	27	17	9	500	50.00	170
サラブリ（中部）	18	1	23	20,924	23.63	80
ペチャブリ（中部）	14	14	9	646	22.84	78
ソンクラー（南部）	5	4	8	1,971	48.26	164
ロイエット（東北部）	2	2	9	3,750	35.00	119
その他	245		837			-
合計	**54,554**	**47,684**	**57,326**	**1,202**	**25.38**	**86**

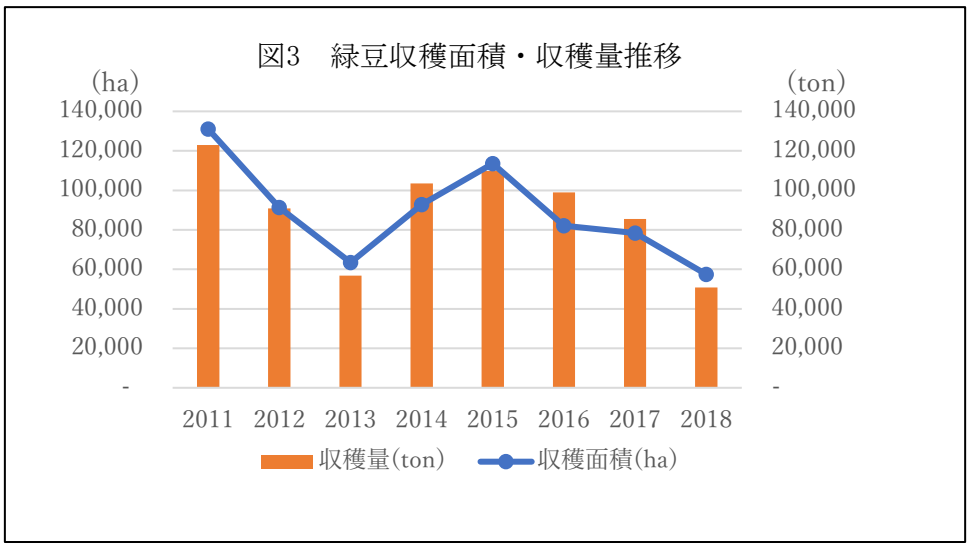
出所：The Database of Field Crop Production in Thailand 2016
タイ農業普及局

なお、農業普及局の 2011 年～2018 年の緑豆の生産データによると、収穫面積と収穫量は年により大きな変動がある。

また、緑豆生産農家は、天水を利用して、卸売業者との契約で緑豆を栽培しているのが一般的である。また、収穫物は仲買人を通じて卸売業者に販売しているケースがみられる。

図 2　緑豆生産地





出所：農業普及局提供資料より作成

表 9　緑豆生産の推移

	2011 年	2012 年	2013 年	2014 年	2015 年	2016 年	2017 年	2018 年
農家数	50,888	35,882	21,595	45,690	50,151	45,004	34,781	26,512
栽培面積 (ha)	146,554	96,579	64,427	95,156	116,493	90,961	82,143	-
収穫面積(ha)	131,022	91,341	63,440	92,744	113,555	82,062	78,406	57,456
収穫量(ton)	122,979	90,869	56,818	103,566	109,764	99,007	85,522	50,785
平均価格(TH/kg)	24	27	28	32	28	27	21	23
平均価格(円/kg))	82	92	95	109	95	92	71	78

出所：農業普及局資料

一方、2016 年にタイ農業研究開発機構（Agriculture Research Development Agency）が ASEAN 地域でのタイの食料安全保障戦略に関する報告書をまとめており 、その中でタイにおける緑豆生産の課題として、生産性向上のための質の高い品種の開発などが挙げられている。緑豆栽培農家の中には、農業普及局などから高品質の種子の提供を受ける農家もあるが、供給量が限られている。多くの農家は前年度の収穫物の中から種子をとっており、発芽率の低さや単収の低さにつながっていると考えられる。また、同報告書では緑豆生産に関する以下の戦略を提起している。

ビジョン：　品質の高い緑豆の生産、食品安全の確保、国内外の市場に見合う供給

ゴール　：
1)　品質の高い安全な緑豆を生産する
2)　輪作により持続的に緑豆を供給する
3)　タイが ASEAN での緑豆生産の中心になる

戦略　：
1)　輪作による高品質で安全性の高い緑豆生産体制の構築
2)　近隣国との協力による緑豆生産の効率性と品質の改善
3)　緑豆の種子の安定した需給体制の構築

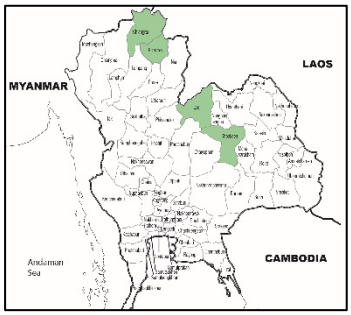
実施計画：
1)　緑豆の品種、育種、生産・加工技術に関する研究開発
2)　緑豆の安定供給と地方政府による安全管理体制の構築
3)　栽培農家への品質の高い種子の供給
4)　高品質を維持するための効果的な生産・貯蔵方法の推進
5)　その他の畑作物との輪作の推進
6)　周辺国との緑豆生産における協力の推進
7)　安全性テストと品質管理体制の強化
8)　法制度と政府による支援環境の整備

２）竹小豆　(Rice Beans／Red Bamboo Bean／Red Peyin Bean)

日本豆類協会保有のタイ産竹小豆のサンプル

竹小豆はタイ北部及び東北部で生産されている。農業普及局の 2016 年の統計情報ではチェンライ県、パヤオ県、コンケン県、ルーイ県の 4 県で栽培されており、生産量は 934t となっているが、実際の生産量はこれを遥かに上回っていると思わ

図 4　竹小豆生産地



れる。竹小豆は比較的水の少ない環境での栽培が可能なことから、灌漑設備がなく天水での農業に依存している地域で米やとうもろこしなどの主要農作物の裏作として栽培されることが多い。中国南部からベトナム、ラオス、タイ北部等が原産で、これらの産地では煮て食べられる。タイ国内の市場規模は小さいが、主にデザートの食材として利用されている。

表 10　　竹小豆生産状況

県	作付面積 (ha)	収穫面積 (ha)	生産量 (ton)	収量 (Kg/ha)	価格 (THB/Kg)	価格 (円/Kg)
チェンライ（北部）	690	305	609	1,999	31	105
コンケン（東北部）	336	336	315	938	23.97	81
パヤオ（北部）	57	-	-	-	-	-
ルーイ（東北部）	7	7	10	1,438	32	109
合計	**1,090**	**648**	**934**	**1,444**	**28.64**	**97**

出所：農業普及局資料

3）ササゲ　(Cowpea)

日本豆類協会保有のタイ産ささげのサンプル
（black pelun）

タイのスーパーで販売されていた
タイ産ささげ（有機栽培製品）

ササゲは食材として広く用いられているが、タイ東北部では郷土料理のパパイヤサラダ（ソムタム）等に鞘のまま野菜として使われている。ササゲは東北部や北部で広く栽培されているが、自家消費や地域の市場での直売用に小規模で栽培している農家も多く、農業普及局の 2016 年の統計情報ではランパン県（北部）、サコンナコン県（東北部）、スリン県（東北部）の 3 県のみでの生産となっている。

図 5　ササゲ生産地

ブリラム・ラジャパット大学の報告では、タイにおける主なササゲの病害として、1）雨季に発生する根腐れ、2）雨季のアルタナリア菌による被害、3）収穫期の土壌の黴による立ち枯れ病（Charcoal Rot）が挙げられている。

表 11　ササゲ生産状況

県	作付面積 (ha)	収穫面積 (ha)	生産量 (ton)	収量 (Kg/ha)	価格 (THB/Kg)	価格 (円/Kg)
ランパン（北部）	64	64	112	1,750	23	78
サコンナコン（東北部）	3	-	-	-	-	-
スリン（東北部）	3	3	7	2,500	31.11	106
合計	**70**	**67**	**119**	**1,781**	**23.49**	**80**

出所：農業普及局資料

4）インゲン豆　(Kidney Beans／Bush Beans など)

市場で販売されている赤インゲン

王室プロジェクト試験場で試験栽培されている赤インゲン豆

インゲン豆は主にタイ北部で栽培されており、特にメーホンソン県での生産量が多い。タイでは主にデザートの食材として利用されている。栽培時期は、

1）雨季の初期にあたる 5 月～7－8 月、

2）雨季の終わりにあたる 9 月～11 月

3）乾期にあたる 11 月～2－3 月　に大別される。

王室プロジェクト財団資料では、主な病気として、

1）栽培前期のピシウム病、角斑病、

2）栽培後期の炭疽病、角斑病、さび病、うどんこ病、ピシウム病が挙げられている。

図 6　インゲン生産地

表１２　インゲン生産状況

県	作付面積 (ha)	収穫面積 (ha)	生産量 (ton)	収量 (Kg/ha)	価格 (THB/Kg)	価格 (円/Kg)
メーホンソン（北部）	2,462	2,187	4,013	1,835	22.87	78
チャイヤプーン（東北部）	75	75	61	813	45.00	153
チェンライ（北部）	11	11	17	1,498	23.00	78
パヤオ（北部）	11	7	6	899	16.17	55
チェンマイ（北部）	8	8	18	2,188	25.00	85
ピサヌローク（中部）	1	1	3	3,750	10.00	34
合計	**2,568**	**2,289**	**4,116**	**1,799**	**23.19**	**79**

出所：農業普及局資料

なお、農業普及局から提供された生産データによると、収穫面積と収穫量は年により大きな変動がある。

図7　インゲン豆（Kidney Beans）　収穫面積・収穫量推移

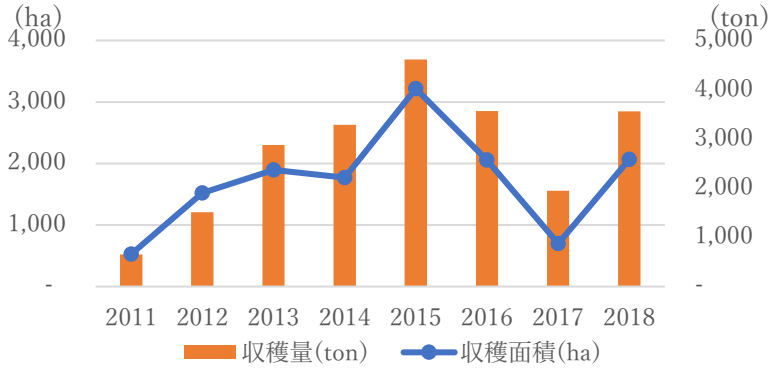


表 13　インゲン豆生産の推移

	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
農家数	3,138	1,819	1,902	1,942	2,056	1,563	1,369	1,144
栽培面積 (ha)	590	1,637	1,941	3,474	3,401	2,543	1,598	-
収穫面積(ha)	527	1,523	1,897	1,772	3,216	2,056	701	2,068
収穫量(ton)	655	1,513	2,875	3,288	4,616	3,563	1,946	3,562
平均価格(THB/kg)	17	34	34	35	23	25	20	18
平均価格(円/kg)	58	116	116	119	78	85	68	61

出所：農業普及局資料

王室プロジェクトショップで販売されている黒インゲン豆の Navy Bean

農家が保管しているインゲン豆の種子（Kidney Bean, navy bean）

５）小豆　(azuki／Small red Beans など)

王室プロジェクトショップで販売されている小豆

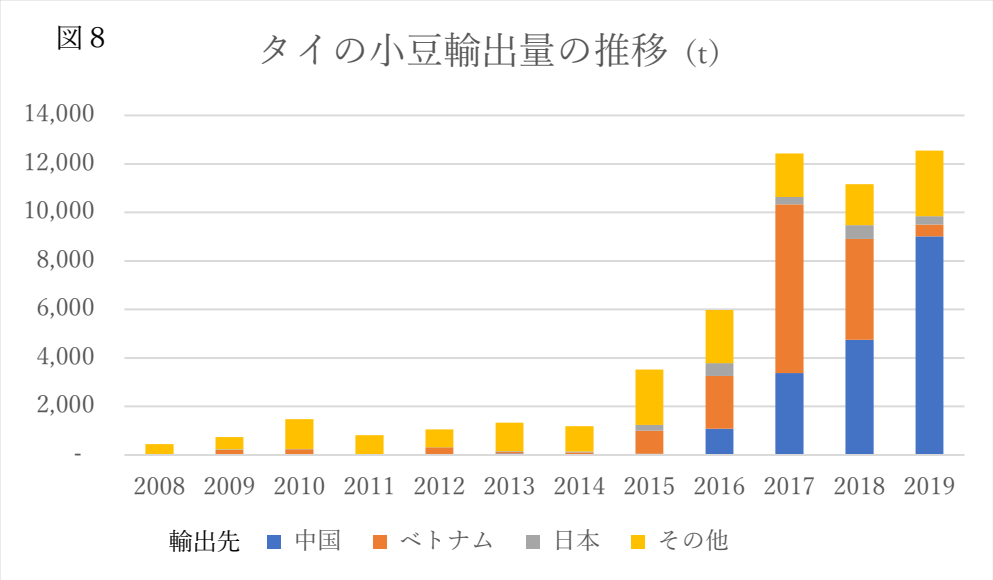
王室プロジェクト試験場で試験栽培されている小豆

小豆の栽培面積、生産量等に関するデータについては、タイの農業普及局が調査していないため、不明である。また、小豆はタイ国の戦略作物でもないため今後とも調査が行われる可能性は少ない。

但し、後で述べるプミポン前国王によりタイ北部でのケシ栽培撲滅と山岳民族の生計向上支援を目的として設立された王室プロジェクト財団（Royal Project Foundation）では、新規導入作物として小豆に興味を持っており、タイ北部山岳部での栽培を増やすための試験研究や技術普及、種子配布等に取り組んでいる。また、王室プロジェクト財団直営のショップでは、小豆の乾燥豆やあんこ、さらには小豆入りアイスを販売するなどして小豆の消費拡大を図ろうとしている。

一方、小豆に関するタイの対外貿易量について、ここ 10 年程度の動きを次章の表 20 及び 24 に掲載したタイの通関統計からみてみると、2008 年の小豆輸出量は 450t であるものの、その後は急激に増加傾向をたどり、2014 年:1,190t、2015 年:3,530t、2016 年:5,980t、2017 年:12,440t となっていることが分かる。

図８



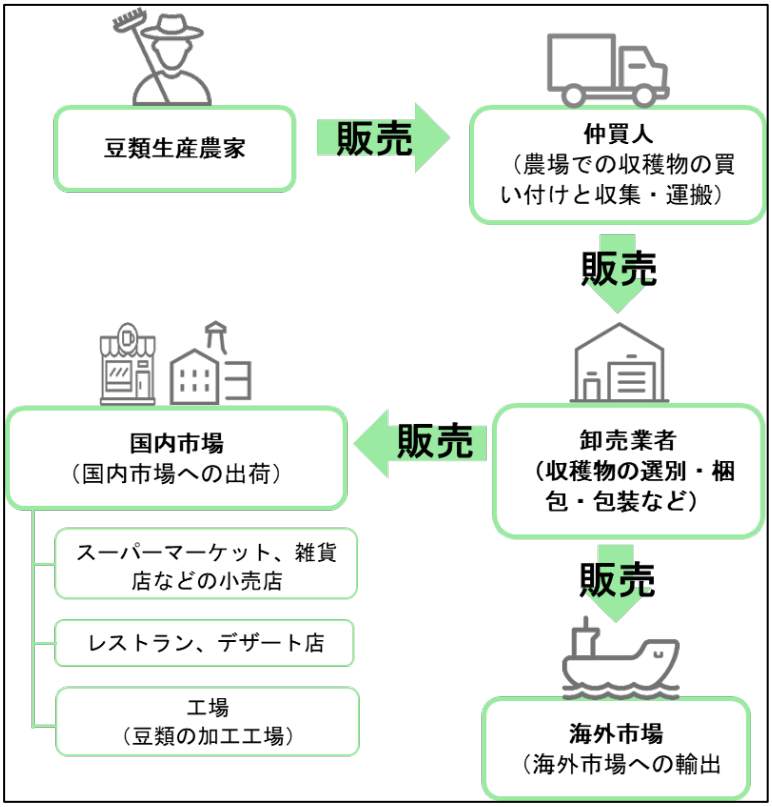
なお、輸入量についても 2008 年:110t、2014 年:330t、2015 年:300t、2016 年:620t、2017 年: 770t と増加傾向を示しているものの、輸出量から輸入量を単純に差し引いた数字が増加傾向にあることから、この差をタイにおける小豆の生産量と単純に仮定すると、ここ数年で小豆の生産が増え、直近では 10,000t 以上の小豆がタイで生産された計算になる。しかし、こうしたことを裏付ける小豆生産に関するデータはない。

また、チェンマイ周辺の小豆生産現場は、我々が訪ねたパン・ダ農業ステーションから山間部に向けてさらに車で３時間移動しなければならないため、今回の訪問地には入っておらず、その実態を調査するには至らなかった。

4　タイの豆類流通状況

（1）豆類の主な流通経路

豆類の主な流通経路は、以下の図のように、生産農家→仲買人→卸売業者　→卸売市場・輸出という流れになっている。



卸売業者は収穫物の買取だけでなく、農家への種子提供や施肥・農薬散布などの技術指導を行っている。収穫時には卸売業者のパートナーである仲買人が農場から卸売業者までの運搬を担う。豆類の収穫は点在する比較的小さな圃場で行われるため、仲買人の役割も重要になる。チェンマイ県での関係者からの聞き取りでは、農場出荷価格は市場価格と豆の質や水分量によって決められるとのことであった。卸売業者は収集した豆類の梱包や包装を行い、国内や海外の市場に卸す。国内市場での豆類の主な買取先としては、1）スーパーマーケット、雑貨店などの小売り店、2）レストランやデザート店、3）加工業者、が挙げられる。

チェンマイ県の豆類の卸売業者であるリムサクダクン農産業（タイ）の倉庫

（２）その他の流通経路

豆類に関しては、上記のように卸売業者を介在させた流通経路とは別に、農家や産地集荷商人（仲買人）が収穫物を地元市場で販売するケースも多いと言われている。その際にも、雑豆類では大豆や落花生と違って生産者組織がないため、個別農家がそれぞれ対応するしかない。

本調査で訪れた、タイ最大のバンコクのタラート・タイやタイ第２のチェンマイのムアン・マイ市場（ニュー・シティ市場）における一般の生鮮農作物に関しても、基本的には販売者と購入者との直接相対取引であり、日本のように卸売業者が介在している訳ではなく、競りも行われていなかった（国の機関で、毎日取引の基準となる価格を決めている。）。なお、これらの市場における販売者は農産物生産者や産地集荷商人（仲買人）であり、購入者は地方の卸売業者、周辺の小売業者、スーパーマーケット、消費者等である。

なお、ムアン・マイ市場では、農家や産地集荷商人が収穫物を直接トラックで持ち込み市場施設の中や、その周辺の道路脇で販売している状況をみることができた。但し、乾燥豆については、ここでは扱われていなかった。

チェンマイのムアン・マイ市場

ムアン・マイ市場で販売されている莢つきの豆類

５　タイの豆類消費状況

FAO の統計情報によると、タイでの豆類の消費量は 2013 年にはエンドウ豆、ササゲ・インゲン豆類、落花生、大豆、その他の豆類の合計で約 210 万トンであった。ササゲ・インゲン豆類の消費量は減少傾向にあるが、タイでは雑豆の多くは野菜や伝統的菓子の材料に使われることが多く、今後も一定の需要が見込まれる。緑豆はもやしやスナック菓子として食される他、春雨や飴菓子などの加工食品原料として広く利用されている。豆類ではないが、最近ではチアシードやキヌアが健康食品としてタイでも脚光を浴びている。

表 14　豆類国内消費量　(1,000 トン)

	1991-2000 平均	2001-2010 年平均	2011 年	2012 年	2013 年
エンドウ豆	3	5	6	7	9
ササゲ・インゲン豆	153	96	64	55	85
落花生	89	76	80	88	92
大豆	854	1,681	2,053	2,174	1,765
その他の豆	45	78	105	101	134

出所：FAOSTAT のデータ　より作成

また、2013 年のタイ人一人当たりの豆類摂取量は約 7 キロ/年、114 キロカロリー/日で、日本やマレーシア、ベトナムよりも高い。また、タイ人の豆類からのプロテイン摂取量は日本人の約 2 倍、脂肪摂取料は日本人よりやや少なくなっている。

表 15　豆類からの摂取量（2013 年）

摂取量（キロ／人／年）						
	エンドウ豆	ササゲ・インゲン豆	落花生	大豆油	その他の豆	合計
米国	1.20	2.84	3.07	23.29	0.19	30.59
日本	0.12	1.37	0.71	3.24	0.06	5.50
タイ	0.14	1.27	0.59	3.03	2.00	7.03
マレーシア	0.73	1.34	0.95	2.35	1.00	6.37
ベトナム	-	1.66	2.73	1.02	1.32	6.73
摂取カロリー（ キロカロリー／人／日）						
米国	11.00	27.00	51.00	528.00	2.00	619.00
日本	1.00	12.00	11.00	78.00	1.00	103.00
タイ	1.00	12.00	9.00	73.00	19.00	114.00
マレーシア	7.00	12.00	14.00	57.00	9.00	99.00
ベトナム	-	15.00	44.00	25.00	12.00	96.00
プロテイン摂取量　（グラム／人／日）						
米国	0.79	1.74	2.31	0.17	0.12	5.13
日本	0.07	0.72	0.49	-	0.04	1.32
タイ	0.09	0.74	0.37	-	1.15	2.35
マレーシア	0.44	0.79	0.62	-	0.56	2.41
ベトナム	-	0.97	1.88	-	0.76	3.61
脂肪摂取量　（グラム／人／日）						
米国	0.04	0.12	4.43	59.58	0.01	64.18
日本	-	0.05	0.93	8.80	-	9.78
タイ	0.01	0.05	0.71	8.31	0.11	9.19
マレーシア	0.03	0.05	1.20	6.45	0.07	7.80
ベトナム	-	0.06	3.63	2.79	0.07	6.55

FAOSTAT のデータより作成

6　タイの豆類の貿易状況

（1）概観

本調査の対象である雑豆類は、輸出入統計上は以下の表のように分類されている。マメ科野菜の 2018 年の総輸出額は FOB 価格ベースで 37.6 億バーツ（約 128 億円）となり、冷凍品が 58%、乾燥品が 33%を占めている。年度により増減はあるが、冷凍品のマメ科野菜の輸出全体に占める割合が大きくなっている。また、総輸入額は CIF 価格ベースで 12.9 億バーツ（約 44 億円）となり、乾燥品が 79%を占めている。乾燥マメの輸入は 10 年前の 2008 年と比べると大幅に伸びているが、直近では減少傾向がみられる。

表 16　マメ科野菜　輸出金額　（FOB 価格：1,000 タイバーツ）

	2008 年	2014 年	2015 年	2016 年	2017 年	2018 年	HS コード
生鮮・冷蔵	24,554	53,421	39,168	49,064	74,609	80,796	0708(マメ科野菜全体)
冷凍	1,362,465	2,050,949	2,223,172	2,361,863	2,284,585	2,178,896	071021(エンドウ)、071022(ササゲ属とインゲン属)、071029(その他の豆)
乾燥	1,499,447	1,443,398	1,876,172	1,463,272	1,848,119	1,240,073	0713(マメ科野菜全体)
豆粉	164,236	69,172	66,978	79,237	80,908	77,924	110610(マメ科野菜全体)
その他の豆類調製品	148,943	160,652	174,687	168,702	181,857	186,066	200540(エンドウ)、200551(ササゲ属とインゲン属)
ふすま、糠、かす	2,423	9,680	1,277	322	139	93	230250(マメ科野菜全体)
合計	**3,202,068**	**3,787,272**	**4,381,454**	**4,122,460**	**4,470,217**	**3,763,848**	

出所：タイ関税局データベースより集計（以下同じ）

表 17　マメ科野菜　輸入金額　（CIF 価格：1,000 タイバーツ）

	2008 年	2014 年	2015 年	2016 年	2017 年	2018 年	HS コード
生鮮・冷蔵	53,323	81,328	81,950	80,761	75,067	84,446	0708(マメ科野菜全体)
冷凍	59,883	92,213	97,898	155,814	18,355	104,422	071021(エンドウ)、071022(ササゲ属とインゲン属)、071029(その他の豆)
乾燥	412,175	1,679,721	1,802,936	1,852,806	1,116,981	1,026,288	0713(マメ科野菜全体)
豆粉	8,096	3,120	5,201	6,804	14,949	26,852	110610(マメ科野菜全体)
その他の豆類調製品	24,749	47,185	51,222	50,508	50,142	51,771	200540(エンドウ)、200551(ササゲ属とインゲン属)
ふすま、糠、かす	4,329	1,362	2,984	16	19	37	230250(マメ科野菜全体)
合計	**562,555**	**1,904,929**	**2,042,191**	**2,146,709**	**1,385,513**	**1,293,816**	

（2）輸出

1）生鮮・冷蔵豆

2018 年の生鮮・冷蔵マメ科野菜の輸出額は FOB 価格ベースで 8000 万バーツ（約 2.7 億円）。年により輸出相手国の比率が大きく異なるが、2018 年は日本が最大の輸出相手国となっている。また、2018 年の輸出量は、エンドウが 811 トン、ササゲ・インゲン属が 127 トンであった。

図 9　マメ科野菜（生鮮・冷蔵）輸出額

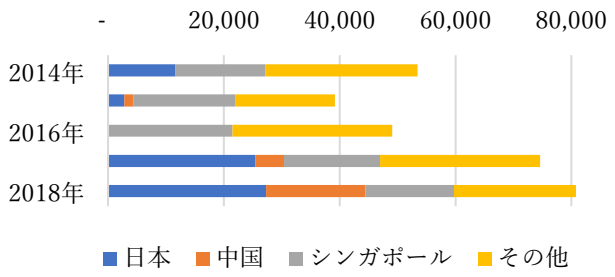


表 18　マメ科野菜（生鮮・冷蔵）輸出

（輸出量：トン）
（輸出額：FOB 価格、1,000 バーツ）

品目	HS コード	2008 年		2014 年		2015 年		2016 年		2017 年		2018 年	
		輸出量	輸出額	輸出量	輸出額	輸出量	輸出額	輸出量	輸出額	輸出量	輸出額	輸出量	輸出額
エンドウ(Pisum sativum)	0708.10	58	3,716	112	8,313	62	3,441	3	190	757	33,512	811	36,361
ササゲ属・インゲン属 (Vigna spp, Phaseolous spp)	0708.20	-	-	216	15,318	150	9,507	173	8,745	104	4,785	127	6,556
その他	0708.90	614	20,179	540	29,789	408	26,221	756	40,132	801	36,311	507	37,868

2）冷凍豆

2018 年の冷凍マメ科野菜の輸出額は FOB 価格ベースで 21.8 億バーツ（約 74 億円）であった。輸出先では日本に向けた輸出の割合が安定して高く、2018 年には日本向け輸出が輸出全体の 88%を占めている。

図10　マメ科野菜（冷凍）輸出額

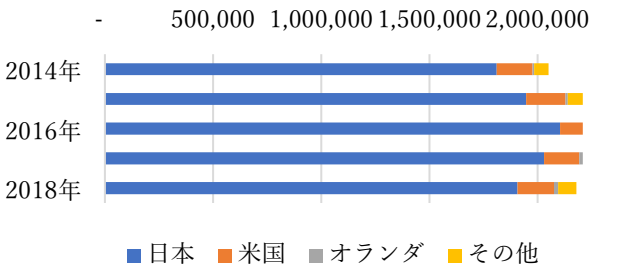


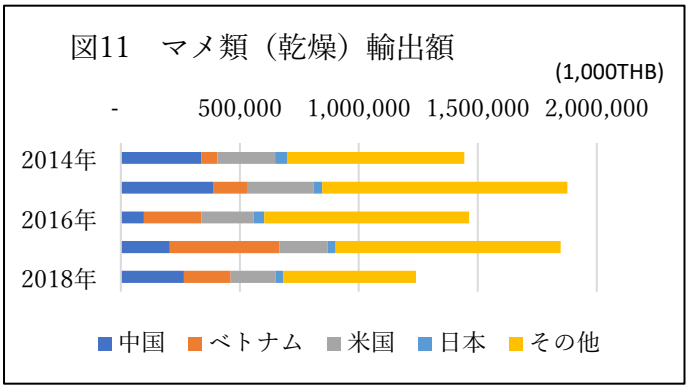
表 19　マメ科野菜（冷凍）輸出

（輸出量：トン）
（輸出額：FOB 価格、1,000 バーツ）

品目	HS コード	2008 年		2014 年		2015 年		2016 年		2017 年		2018 年	
		輸出量	輸出額	輸出量	輸出額	輸出量	輸出額	輸出量	輸出額	輸出量	輸出額	輸出量	輸出額
エンドウ (Pisum sativum)	0710.21	17	683	102	7,711	43	5,045	24	3,023	22	2,663	550	4,121
ササゲ属・インゲン属 (Vigna spp, Phaseolous spp)	0710.22	14,440	667,008	8,514	480,588	7,659	464,762	9,099	586,306	9,405	579,758	9,626	590,845
その他	0710.29	11,868	694,774	23,001	1,562,650	25,169	1,753,365	24,799	1,772,534	24,448	1,702,164	24,006	1,583,930

3）乾燥豆

2018 年の乾燥マメ類の輸出額は FOB 価格ベースで 12.4 億バーツ（約 42 億円）であった。2018 年には世界の 72 の国・地域向けに広く輸出され、相手国の中では中国、ベトナム、米国の割合が大きく、3 か国で輸出全体の 52%を占めた。輸出品目では金額ベースでは緑豆・ケツルアズキが多く、次いで小豆となっている。近年の小豆の輸出量の伸びが大変目立っている。輸出先は中国、ベトナムである。



（輸出量：トン）
（輸出額：FOB 価格、1,000 バーツ）

表 20　マメ類（乾燥）輸出

品目	HS コード	2008 年		2014 年		2015 年		2016 年		2017 年		2018 年	
		輸出量	輸出額	輸出量	輸出額	輸出量	輸出額	輸出量	輸出額	輸出量	輸出額	輸出量	輸出額
エンドウ (Pisum sativum)	0713.10	264	12,031	47	1,687	14	2,021	51	2,441	24	2,487	303	5,992
ひよこ豆 (Chickenpeas Garbanzos)	0713.20	1,819	46,646	-	0.3	6	704	10	887	9	561	32	908
緑豆、ケツルアズキ(Vigna mungo (L.) Hepper, Vigna Radiata (L.)Wilczek)	0713.31	不明	1,068,855	不明	696,455	不明	980,255	不明	53,239	不明	1,031,578	不明	678,952
アズキ豆 (Small red beans: Phaseolus Vigna angularis)	0713.32	449	12,203	1,193	59,703	3,527	137,766	5,984	234,482	12,437	384,168	11,165	285,021
インゲン豆 (Kidney beans: Phaseolus vulgaris)	0713.33	不明	5,782	不明	44,808	不明	59,076	不明	30,662	不明	53,784	不明	6,369
バンバラ豆 (Bambara beans: Vigna subterranea or Voandzeia subterranea)	0713.34	-	-	3	829	-	-	-	-	0.2	26	0.1	30
ササゲ豆 (Cowpea: Vigna unguiculata)	0713.35	-	-	6	463	9	662	6	475	7	680	16	2,233
その他の乾燥ササゲ属、インゲン属の豆 (Vigna spp, Phaseolus spp)	0713.39	不明	251,508	不明	281,360	不明	282,524	不明	304,294	不明	270,346	不明	176,421
ヒラマメ (Lentils)	0713.40	1,924	64,019	189	9,392	361	15,566	218	12,310	2,766	74,145	276	8,321
ソラマメ (Broad beans and Horse beans: Vicia faba var. major and Vicia faba var. equina, Vicia faba var. minor)	0713.50	6	308	-	8	0.1	25	0.1	23	-	6	-	4
キマメ (Pegion Peas: Cajanus cajan)	0713.60	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
その他の乾燥マメ	0713.90	886	35,608	3,725	346,192	3,773	395,562	1,068	50,843	541	29,986	1,156	75,819

4）豆粉、その他調製品

2018 年の生鮮・冷蔵マメ科野菜の輸出額は FOB 価格ベースで 2.64 億バーツ（約 9 億円）で、過去 5 年間の輸出は比較的安定している。

表 21　その他のマメ類調製品輸出

（輸出量：トン）
（輸出額：FOB 価格、1,000 バーツ

品目	HS コード	2008 年		2014 年		2015 年		2016 年		2017 年		2018 年	
		輸出量	輸出額	輸出量	輸出額	輸出量	輸出額	輸出量	輸出額	輸出量	輸出額	輸出量	輸出額
マメ粉	1106.10		164,236		69,172		66,978		70,327		80,908		77,924
エンドウ調製品（Pisum sativum)	2005.40	683	139,239	687	143,360	838	154,778	924	152,041	915	154,406	950	151,955
ササゲ属またはインゲン属の豆 調製品 (Vigna spp, Phaseolus spp)	2005.51	60	9,704	285	17,292	311	19,909	261	16,661	592	27,451	837	34,111
豆からのふすま、糠、その他のかす	2302.50	119	2,423	652	9,680	23	1,277	5	322	2	139	0.5	93

（3）輸入

1）生鮮・冷蔵豆

2018 年の生鮮・冷蔵マメ科野菜の輸入額は CIF 価格ベースで 8,400 万バーツ（約 2.9 億円）。この 95%以上が中国からのエンドウ豆で占められている。中国からの 2018 年のエンドウマメの輸入量は重量ベースで 2008 年の 1.9 倍、金額ベースでは 1.8 倍となっている。

図12　マメ科野菜（生鮮・冷蔵）輸入額

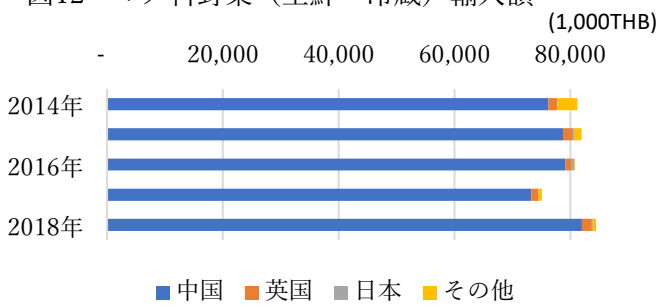


表 22　マメ科野菜（生鮮・冷蔵）輸入

（輸入量：トン）
（輸入額：CIF 価格、1,000 バーツ）

品目	HS コード	2008 年		2014 年		2015 年		2016 年		2017 年		2018 年	
		輸入量	輸入額	輸入量	輸入額	輸入量	輸入額	輸入量	輸入額	輸入量	輸入額	輸入量	輸入額
エンドウ（Pisum sativum)	0708.10	4,077	47,527	6,630	76,136	6,789	79,045	6,669	79,550	6,462	74,629	7,561	83,183
ササゲ属・インゲン属の豆 (Vigna spp, Phaseolous spp)	0708.20	-	-	1	217	10	166	17	239	1	247	40	408
その他	0708.90	100	4,214	225	4,975	119	2,739	10	973	9	194	26	856

2）冷凍豆

2018 年の冷凍マメ科野菜の輸入額はCIF 価格ベースで 1 億 400 万バーツ（約 3.5 億円）。年により増減があるが 50%以上が中国からの輸入になっている。輸入全体では、2008 年に比べて重量ベースで 1.4 倍、金額ベースで 1.7 倍に増加している。

図13　マメ科野菜（冷凍）輸入額

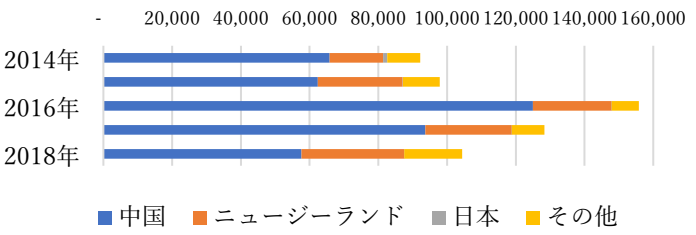


表 23　マメ科野菜（冷凍）輸入

（輸入量：トン）
（輸入額：CIF 価格、1,000 バーツ）

品目	HS コード	2008 年		2014 年		2015 年		2016 年		2017 年		2018 年	
		輸入量	輸入額	輸入量	輸入額	輸入量	輸入額	輸入量	輸入額	輸入量	輸入額	輸入量	輸入額
エンドウ（Pisum sativum)	0710.21	740	34,785	985	45,018	1,347	63,256	1,042	47,483	1,123	49,070	1,389	56,973
ササゲ属・インゲン属の豆 (Vigna spp, Phaseolous spp)	0710.22	172	4,130	240	11,335	117	6,012	190	9,231	213	11,078	134	6,640
その他	0710.29	668	20,968	617	35,860	488	28,630	1,933	99,100	1,303	68,207	714	40,809

3）乾燥豆

2018 年の乾燥マメ類の輸入額は CIF 価格ベースで 10.3 億バーツ（約 35 億円）。ミャンマーからの緑豆・ケツルアズキの輸入減少などにより 2017 年、2018 年は輸入量が大きく減少している。

図14　マメ類（乾燥）輸入額

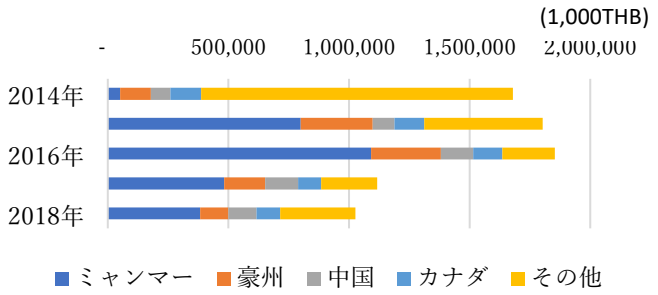


表 24　マメ類（乾燥）輸入

（輸入量：トン）
（輸入額：CIF 価格、1,000 バーツ）

品目	HS コード	2008 年		2014 年		2015 年		2016 年		2017 年		2018 年	
		輸入量	輸入額	輸入量	輸入額	輸入量	輸入額	輸入量	輸入額	輸入量	輸入額	輸入量	輸入額
エンドウ (Pisum sativum)	0713.10	264	12,031	47	1,687	14	2,021	51	2,441	24	2,487	303	6,001
ひよこ豆 (Chickenpeas Garbanzos)	0713.20	228	7,184	312	5,602	543	14,424	603	25,490	798	32,444	711	23,254
緑豆、ケツルアズキ (Vigna mungo (L.) Hepper, Vigna Radiata (L.)Wilczek)	0713.31	不明	153,201	不明	977,280	不明	1,018,898	不明	1,307,913	不明	606,635	不明	514,777
アズキ豆 (Small red beans: Phaseolus Vigna angularis)	0713.32	108	2,520	334	15,560	299	15,653	620	32,430	766	33,151	579	20,910
インゲン豆 (Kidney beans: Phaseolus vulgaris)	0713.33	不明	6,359	不明	7,458	不明	12,940	不明	4,962	不明	33,964	不明	47,594
バンバラ豆 (Bambara beans: Vigna subterranea or Voandzeia subterranea)	0713.34	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ササゲ豆 (Cowpea: Vigna unguiculata)	0713.35	-	-	18	750	102	3,043	85	2,697	63	2,475	99	3,606
その他の乾燥ササゲ属、インゲン属の豆 (Vigna spp, Phaseolus spp)	0713.39	不明	24,352	不明	45,931	不明	34,776	不明	66,815	不明	75,919	不明	79,537
ヒラマメ (Lentis)	0713.40	329	14,195	154	20,005	127	9,346	170	9,533	173	15,628	171	11,457
ソラマメ (Broad beans and Horse beans:)	0713.50	342	38,547	3,715	93,337	3,204	103,239	4,786	161,659	4,113	118,197	3,649	91,174
キマメ (Pegion Peas: Cajanus cajan)	0713.60	-	-	-	-	-	-	-	-	22	151	11	325
その他の乾燥マメ	0713.90	172	4,987	3,331	322,046	2,957	360,192	72	5,233	229	7,586	860	40,671

4）豆粉、その他調製品

2018 年の豆粉を含むその他のマメ類調整品の輸入額は CIF 価格ベースで 7900 万バーツ（約 2.7 億円）。具体的にはマレーシアやベトナムからのササゲ・インゲン属調製品やノルウェーからの粉製品の割合が大きかった。輸入量は多くはないが、2018 年の輸入は 2008 年に比べて 2 倍以上に増加している。

（輸出量：トン）
（輸出額：CIF 価格、1,000 バーツ）

表 25　その他のマメ類調製品輸入

品目	HS コード	2008 年		2014 年		2015 年		2016 年		2017 年		2018 年	
		輸入量	輸入額	輸入量	輸入額	輸入量	輸入額	輸入量	輸入額	輸入量	輸入額	輸入量	輸入額
マメ粉	1106.10		8,096		3,120		5,201		6,804		14,949		26,852
エンドウ調製品 (Pisum sativum)	2005.40	31	3,066	129	6,969	48	3,996	63	6,426	44	4,084	41	4,003
ササゲ属またはインゲン属の豆 調製品 (Vigna spp, Phaseolus spp)	2005.51	544	21,683	864	40,216	960	47,226	856	44,082	896	46,058	997	47,768
豆からのふすま、糠、その他のかす	2302.50	166	4,329	42	1,362	97	2,984	-	16	1	19	0.2	37

7　タイと日本との豆類に関する貿易関係

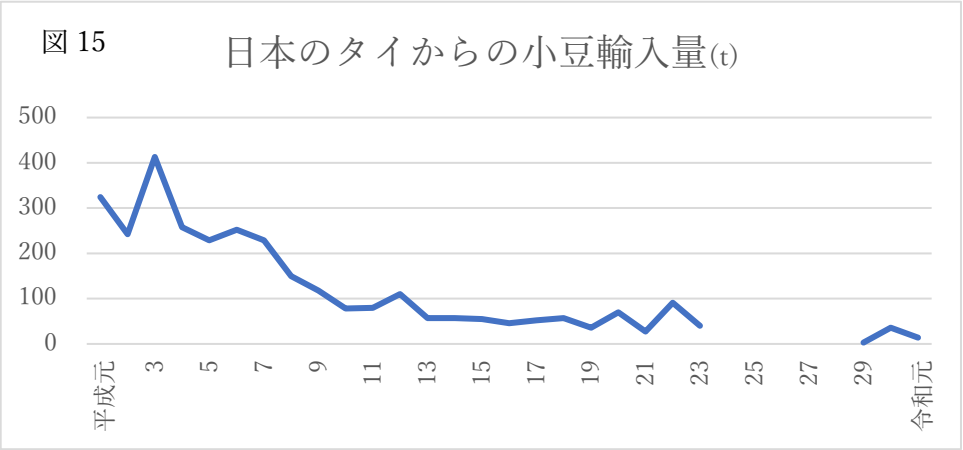
（1）小豆

我が国のタイから豆類の輸入量の推移を平成元年からみてみると、小豆と竹小豆に関しては、タイが我が国にとって極めて重要な輸入先であったことが分かる。

小豆に関しては、我が国の輸入先としては平成元年以降からしばらくは、中国が圧倒的なシェアを誇っていたが、台湾とタイからの輸入も相当量あった。特に平成３年については、タイが我が国の小豆の輸入先としては、中国に次ぐ位置を占めていた。

しかしその後、我が国はタイからの小豆の輸入量を急速に減らして行き、平成２４年以降はしばらく輸入が行われないという時期が続いた。なお、平成２９年以降からわずかながらタイから小豆の輸入が再開された。

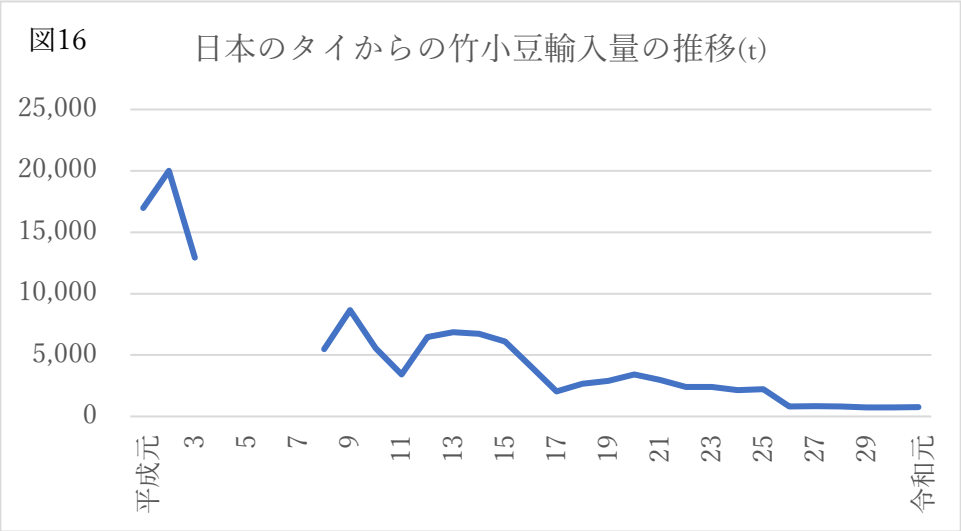
図 15



（２）竹小豆

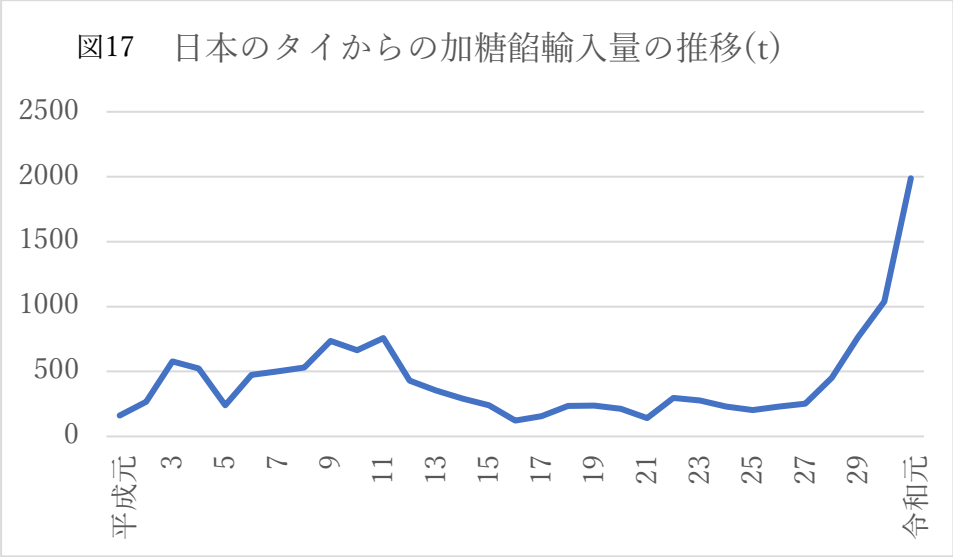
我が国のタイからの竹小豆輸入量の推移を平成元年からみてみると、当初はタイからの輸入量が全体の９割以上と圧倒的なシェアを占めており、輸入量も２万ｔ程度であったが、その後は急激に減少していった。

そして、平成２６年にはタイからの輸入量は 800t にまで落ち込み、ミャンマーからの竹小豆の輸入がタイからの輸入量を上回ることになった。なお、現在では我が国のタイからの竹小豆の輸入量は 700t 台にまで減少している。



（３）加糖餡

我が国のタイからの加糖餡輸入量の推移を平成元年からみてみると、当初はタイからの輸入量はほとんどなく、加糖餡の輸入はほとんどが中国からであった。現在も我が国の加糖餡の輸入は中国からが大半を占める状況は変わらないものの、平成２８年頃からタイからの輸入が急激に増加しており、現在もその傾向が続いていることは注目に値する。



Ⅱ　主な訪問先での調査概要

２月１７日（月）バンコク

１）農業協同組合省農業普及局（カセサート大学内に設置されている。）

（タイの豆類生産状況の一般説明）

タイの農業は米作が中心であり、豆類については米の裏作として栽培することはあるものの、戦略作物ではない。むしろタイは豆類に関しては輸入に依存しており、豆類全体（主として大豆）の輸入量は320万トンで、1,320億円に相当する額を海外から豆類を購入するために支払っている。豆類の栽培には灌漑水が必要ない上に、収穫までの時間が短いといった利点もあるが、収益が少なく労力も多くかかるため、ここ数年は収益の良い米、キャッサバに作付け転換する農家が多くなり生産量は減少を続け、今では豆類の自給率は２％に過ぎない。

現在の大豆の栽培農家は3万戸で、栽培面積は24,000ha、収穫量は43,000tとなっている。大豆の生産量については、以前は10万t以上もあったが、ここ数年で急激に減少してこの生産量になった。なお、大豆の利用方法は、主として食用、油用、餌用となっている。

行政としては５年前から、食用乾燥豆類の栽培を振興するために、良質の種子の農家への配布、施設整備、スタッフの育成、技術普及活動等にも取り組んでいる。

（タイの小豆生産についての説明）

小豆は、かつてタイにおいてもっと栽培されていたが、今ではあまり栽培されなくなってきた。以前はゴムの木とともに（ゴムの木の間に）、小豆を植えていたのだが、ゴムの木が大きくなり、混作が不可能になったことにより、栽培されなくなってきた。

また、小豆は餡にして食べられているがタイではあまり人気がなく、ニッチなマーケットとなっている。輸出に回すにしても、FOB価格が600～700ドル/tと想定されるので、農家にとってあまり魅力はない。

（注）日本の通関統計をみてみると、ここ数年カナダから日本に輸出される小豆のCIF価格は1,500～1,600ドル/t、中国小豆のCIF価格は1,200～1,300ドル/t程度であり、タイから日本に入って来る小豆のCIF価格についても特殊な年を除けば中国産とそん色ない価格となっていることが分かる。このことから、小豆の品質さえ確保できれば、農家の生産意欲を起こさせるFOB価格で取引される可能は十分あると考えられる。

（タイの緑豆等ついて）

タイでは、緑豆を砂糖と甘く練った餡で甘い菓子を作って食べる習慣があり、広く人気がある。農業普及局でも、緑豆から作ったタイのお菓子が振る舞われた。美しく成形して鮮やか色を付けたもので、タイで人気がある菓子とのことであった。

また、ご飯に甘くしたココナッツミルクをかけて、そこにマンゴーを添えたもの

も試食した。甘い食べ物が普通に好まれてタイ人の食生活に入り込んでいる様子がよく分かった。

農業普及局で集合写真

緑豆で作った甘い菓子

２）JETRO バンコク事務所

（タイの日本食事情と農業事業に関する一般説明）

タイでは、現在日本食が大変な人気となっており、その店舗数も年々増加している。それに伴って和菓子の需要も伸びており、今後もまだまだ伸びると思う。中でも「どら焼き」は大変人気がある。しかし、タイ人は甘いだけのものはあまり好まず、「甘酢っぱい」といったように、甘い味付けプラス何らかの別の味といったものを好む傾向があると思われる。

一方、タイの農業生産現場に目を向けてみると、日本で考えられるような個別の農家の作物の種類や生産量をコントロールするような農協は存在せず、基本的には各農家が（もしくは農家同士が話し合って）自由な判断で作付けを考えているというのが現状である。このことから、前年の価格によりその次の年の作付け作目が大いに影響を受ける傾向がある。このことから、長期的な作付け変動（戦略）やそれに伴った価格変動といったことが読みにくい傾向がある。

３）在タイ日本国大使館

在タイ日本大使館は、バンコク郡パトゥムワン区に所在し、領事部、広報文化部、日本企業支援センター部で構成されている。

我々調査団は、本大使館において梨田大使への表敬訪問を行った。梨田大使からはタイで調査を進める上での心構えやタイで過ごすための生活面等の丁寧なアドバイスを受けた。

２月１８日（火）バンコク

１）タラート・タイ市場

ここは、タイで一番大きな２４時間オープンの市場であり、全国から商品が集まってくるだけでなく、野菜や果物については、輸入物がかなりのウエートを占めている。但し、ここに集まって来る豆類に関しては、そのほとんどが国産のようであり、卸売りだけでなく小売りも実施していた。

豆類に関しては、赤インゲン豆（red kidney bean）、黒インゲン豆（brack bean）等のインゲン豆を中心にて、500g の袋詰めの状態でうず高く積まれて売られていた。価格についは、500g 袋 30 バーツ（110 円程度）であり、日本の安価なインターネット・サイト販売の価格が 1kg 袋 1,200 円程度であることを考えると、かなり安価であることが分かる。

なお乾燥豆に関しては、こうした小袋入りでの販売のほか、大袋に大量の豆入れて、量り売りでも販売されていた。

黒インゲン

赤インゲン

緑　豆

その他、緑豆（mung bean、green bean）や四角豆が莢つきの束（3～4kg）として、野菜売り場で 180 バーツ（660 円程度）の価格で販売されていた。

そのほか、市場内にはむき実の緑豆等にココナツや砂糖を入れて甘い汁粉状になったものをビニール袋に入れて売られていた。どちらかというと年配の人に人気があるとのことであった。

莢つきの緑豆

莢つきの四角豆

緑豆の汁粉

2）オートーコー市場

ここは、基本的には小売り対応の市場で、高級品を扱っている。高級な果物や野菜を豊富に販売しており、タイの富裕者が訪れる市場とされている。

また、農業協同組合省農業普及局で試食した、緑豆を練った餡で作られた色鮮やかで美しい菓子も豊富に販売されていた。

また、店頭には中国製の白花いんげんを甘く煮たものが売られていた。価格は、およそ 200g～300g のパックで 100 バーツ（360 円）程度であった。

りんご等果実

びわ等果実

白花いんげんの甘納豆

緑豆の菓子

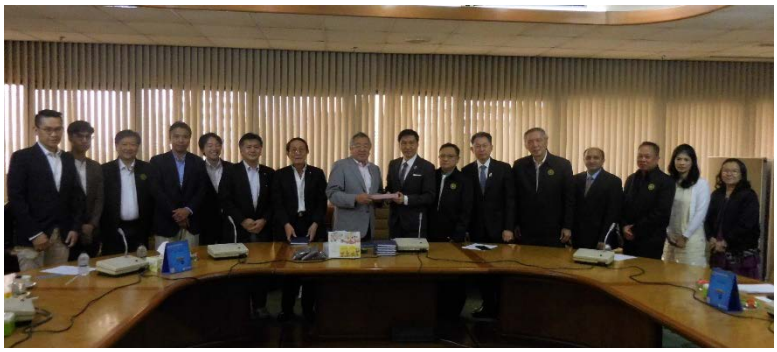
その外、タイ米にココナツミルクをいれて甘くしたものに、赤インゲン豆や黒いんげん豆を甘く煮て混ぜたものが売られていた（北海道で食べられている甘い赤飯のようなもの）。ブッダへのお供えや、何らかのセレモニーの際に食べるとのことであった（竹の中にご飯と豆を一緒にいれて加熱して食べるのが一般的な家庭での調理法とのことであった。）。

３）タイ国トウモロコシ及び農産物取引協会
（協会の役割とタイの豆類生産流通状況の説明）

当協会は６３年前に設立されたものであり、110 の構成員で成り立っており（当日は 10 名程度の会員各社の代表者が参加）、トウモロコシ、コメ、タピオカといった農産物の輸出業者、売買業者等がメンバーである。

タイの豆類は、おおむね北部地域で作付されており、播種期は７月から８月で、収穫は 10 月から翌年の２月までである。不幸なことに、昨年は 40 年ぶりの厳しい干ばつに見舞われ、その影響はいまだに続いている。さらにこの厳しい状況は次の雨期である今年の４月まで続くと思われる。その結果として、ほとんどの作物が（とりわけ豆類においては）、昨年と比較して最大 70～80%の減収になると思われる。

一方、竹小豆、小豆、黒インゲン豆、赤いインゲン豆の価格については、その減収と地方売買業者の投機行為（作物の供給が少ない時には、投機的行動がおこるのは常である。）により、とりわけ価格の上昇率が大きい。また、タイのバーツがこの 12 か月の間に 10%値上がりしたこともあり、我々の農産物輸出業務は全般に厳しい状況に追い込まれている。なんとか来シーズンには正常な状況に戻るものと期待している。



ここ数年のタイの豆類生産状況についてみると、大変厳しい状況になっている

ことが分かる。豆類生産は、労働集約的であり、他の作物と比較して利益が少ないこともあり、農家は他の利益を上げられる作物に生産転換する傾向がある。

竹小豆に関しては、普段は１万ｔ弱の生産があるのだが、今年は2〜3千ｔにしかならない。一方、小豆に関しては、もともと生産量がわずかであり、需要もあまりない。スポット的な需要があれば、栽培してもらって買うこともあるが、継続的な取り組みにはならない。以前にも、種子を農家に渡して、契約栽培で作ってもらったことはあるが、一時的な取組みに終わった。

東北・北部においては、トウモロコシ、キャッサバの後に豆類を入れるような輪作体系を取っているところはあるが、収益の高いトウモロコシやキャッサバの作付に偏る傾向があるのが実情である。

なお、豆類の国内価格は以下のとおりである。

小豆（azuki）	50 バーツ（180 円）／kg
竹小豆（ツルアズキ）（red bamboo bean, rice bean）	43 バーツ（155 円）／kg
黒インゲン豆（black bean）	40 バーツ（144 円）／kg
緑豆（mung bean）	30 バーツ（108 円）／kg
ササゲ（ケツルアズキ）（black matpe）	32 バーツ（115 円）／kg
赤インゲン豆（red kidney）	40 バーツ（144 円）／kg

４）ビッグＣスーパーマーケット

タイで全国展開する大型スーパーマーケットであり、日本で言うと郊外のイオンのようなイメージである。タイで駐在する日本人にはよく利用されている。

売り場には、豆類についても豊富に品揃えされていた。なかでも地元で人気のUSDA 有機農産物認証されたものが多くの棚を占めていたのが目立った。その中には、赤インゲン豆（red kidney)、黒インゲン豆（black bean)、ささげ（cowpea），ひよこ豆（chike pea）があり、価格は60バーツ（220円）/300gで綺麗に棚に並べて販売されていた。有機農産物以外でも、白インゲン豆が（navy bean、haricot）が80バーツ（290円）/250gされていたほか、地元で人気の緑豆（mung bean）が、皮むき前と、皮をむいた後の状態のものが、それぞれ500g袋で販売されていた。

また、ここでは、黒インゲン豆の餡等を使った大福もちも販売されていた。但し、小豆の餡をいれた大福もちは見当たらなかった。

メロン等果実

高級輸入食材の販売

インゲン豆等を使った大福餅

USDA の有機認証を取った人気の豆類

一般的な国産の豆類

２月１９日（水）チェンマイ

１）チェンマイ畑作物センター（農業協同組合省農業局に属する国立農業試験場）（研究の概要とチェンマイの農業概要の説明）

当センターは大豆の研究が主たる業務であるが、緑豆の研究もしている。また、タイ北部地域でどのような作物が適しているのかを調べる研究も実施している。

但し、近年大豆の生産については、ここ数年で農家が他のもうかる作物に変換する傾向にあり、収穫量は減少傾向にある。もうかる作物とは、コメ、トウモロコシ、キャッサバ、サトウキビである。しかも、コメやキャッサバには補助金も出ている。豆類はコストも、労働力もかかる割には、収益が低いので農家が作りたがらない。

しかしながら、当センターが行う大豆の育種等については一定の成果が出ており、その影響もあってチェンマイ周辺地域の面積当たりの大豆収穫量は上昇傾向にある。今後の育種目標は、高収量、耐病性、生育期の短縮化、機能性成分の向上等である。大豆の育種研究に関しては、日本の JIRCAS（国際農業研究センター）との共同研究の実績もある。

一方、小豆やいんげんに関しては、現状では研究は何も行っていないが、以前には研究を実施していた実績もあると聞いている。その際には、本地域に導入可能となるような育種試験も行っていたそうだが、日の目を見ることなく今日に至っている。

現在では、当時の研究成果も踏まえて、小豆やいんげんの種苗保全（遺伝資源保全）のために、少量の栽培を当センター内で継続しているだけである。

小豆の種子保存用の圃場

インゲンの種子保存用の圃場

２）王室プロジェクト財団ショップ

北部タイ山岳部では、従来から貧しく文字や言葉も異なる少数民族が生活しており、彼らがケシ、マリファナ等の麻薬栽培を行っていたが、これらの麻薬栽培の社会的悪影響や、麻薬栽培による農地の地力や物理性への悪影響を断ち切り、彼らの栄養状況改善や貧困撲滅を図ることを目指して王室が始めたのが、王室プロジェクトである（詳しくは、後述）。

ここのショップは、農家が作付した作物を王室プロジェクトが買い取り（但し、当プロジェクト作られた作物については、農家は王室プロジェクトに売る必要はない。）、それを販売するアンテナショップのようなものである。決して安価というわけではないが、購入客には王室プロジェクトの少数民族の貧困対策に協力する気持

ちも強く、積極的に購入されている。

王室プロジェクトは、タイ北部の少数民族が都会に出稼ぎに行かずにその地に留まって農業をすることにより豊かにくらせるような農作物を探しており、その一環として小豆栽培も始められている。こうした経緯から、王室プロジェクトによる小豆栽培は増加傾向にある。但し、インゲンに関しては減少傾向にあるとのことであった。

王室プロジェクトでは、台湾の品種を導入して小豆栽培にも取り組んでいるため、ここのショップでは小豆の乾燥豆が 40 バーツ（140 円）/500g で販売されている。また、乾燥豆だけではなく、小豆を餡子にしたものが真空パックで、105 バーツ（380 円）/500g で販売されている。但し、さほど人気はないとのことであった。ここでは甘く炊いた小豆の粒を入れたアイスクリームも販売されているが、これに関しては大変な人気で、すぐに売り切れるとのことである。なお、インゲンも同様に乾燥豆の状態で 40 バーツ（140 円）/500g で販売されている。

王室プロジェクトショップの外観

王室プロジェクトショップの販売状況

ショップで販売されている小豆のあんこ

ショップで販売されている小豆とインゲン

小豆入りアイスクリーム

２月２０日（木）チェンマイ

１）ムアン・マイ市場（ニュー・シティ市場）

バンコクのタラート・タイに次ぐタイ第２の規模の卸売市場であり、生鮮品（野菜、果物、肉、魚）が全国から集まってくる。

市場開設者はチェンマイ市であり、個々の業者が営業許可を取って賃料を払った上で営業（卸売り）している。但し日本にいるような卸売業者が仲買人にセリを通じて価格決定しつつ販売するわけではなく、国の機関が概ねの価格を毎日決めている。基本的には、生産者、生産者組合もしくは集荷業者がこの市場に直接生産物を持ち込んで小売業者に販売しているケースが多く、現地から生産物を積載してきたトラックが多く止まっている。また、市場施設内の中に直接トラックを持ち込み、荷台をそのまま店舗としているケースも多くみられた。

ムアン・マイ市場の概観（施設内）

ムアン・マイ市場の施設内に車を乗り入れて農産物を販売している状況

なお、市場設備そばの道路脇も卸売市場として活用されており（正式に賃料を支払っている。）、そこには小売業者がトラックで買い付けに来て、道路の途中で少しの間だけ停車させて、一瞬のうちに現金で買い入れを行っていた。

これらの道路脇の営業も含めた、卸売市場の開設時間は午前 3 時から午前 5 時であり、午前 5 時を過ぎると道路脇の市場開設者は慌てて片づけを開始した。但し、市場設備内に店舗を構えて小売りをする場合は 24 時間営業とのことであった。

また、販売されるのは、最低単位が 1kg であり消費者が直接ここで買い入れするには適さない場合もある。なお、豆類はこの市場を通さずに流通している。

ムアン・マイ市場の施設外で農産物を販売している状況

２）王室プロジェクト財団：パン・ダ農業ステーション

（王室プロジェクト財団に関する説明）

王室プロジェクト財団（Royal Project Foundation）は 1969 年にプミポン前国王によりタイ北部でのケシ栽培撲滅と山岳民族の生計向上支援を目的として設立された財団で、これまでに農業分野を中心に多くの事業を実施してきた。現在も山岳地域での栽培に適した農作物の研究開発を行っており、適切な栽培管理による生産量や単収の増加、収穫後の管理、加工技術の開発などの取組もなされている。

当財団は、タイ国内の 6 県に 4 つの農業ステーションと 39 の開発センター(農産物を扱うところでは集出荷・加工施設を指すと考えられる)を有しており、これらの拠点を通じて製品開発、販売促進・物流面で生産農家支援を行っている。一方、王室プロジェクト産品の製品加工・販売会社である「ドイ・カム」は農作物および加工品の販売で大きな役割を担っており、「ドイ・カム」ブランドの製品はコンビニエンスストアやスーパーマーケットで広く販売されている。

また、王室プロジェクト財団は、これまでも海外機関との連携による品種の開発などを通じて豆類の生産推進にも大きく貢献してきた。1971 年には米国機関との協力で小豆（Azuki Bean)、ライ豆（Lima Bean)、ウズラ豆（Pinto Bean）の研究開発と栽培が開始したこともある。小豆はチェンマイ県およびチェンライ県での栽培に適しており、山岳民族によりケシの代替作物として広く栽培されるようになっている。

表 26　王室プロジェクト財団による豆類生産

種類	2016/7 年		2017/8 年		2018/9 年 *1	
	キロ	バーツ	キロ	バーツ	キロ	バーツ
インゲン豆 (Red Bean)	31,840	953,680	6,413	224,455	14,516	477,777
インゲン豆 (Navy Bean)	8,930	312,550	24,312	729,420	10,727	201,726
黒ササゲ(Black Cowpea)	-	-	-	-	4,180	91,960
小豆 (Azuki Bean)	299,175	11,523,143	159,752	4,034,048	-	-
黒大豆 (Black Soybean)	-	-	588	17,640	1,700	47,385

出所：王室プロジェクト財団提供資料

（パン・ダ農業ステーションの一般的な取組みに関する説明）

パン・ダ農業ステーションは、王室プロジェクト財団が有する４つの農業ステーションのうちの一つであり、タイ北部山岳部のチェンマイ周辺の少数民族等が持続的農業を通して貧困からの脱出することを目指して、農業の研究・普及の面から支援する組織である。このことから経済的メリットを念頭に、他地域ではあまり作られていない新規作物導入に主として取り組んでいる。

王室プロジェクトの別部門では、生産品の買い取り・加工も実施しているが、王室プロジェクトで種子提供や技術援助を受けた農家であっても王室プロジェクトに生産物を販売する義務は負っていない。

なお、王室プロジェクトの取組みはタイ王室直轄の取り組みであり、国民からは

信頼と理解を十分に得ている。しかしながら、政府の農業振興部門・研究部門と何らかの連携をしているわけではなく、その取り組みは行政組織とは全く独立して行われている。

パンダ農業ステーションの外観

パンダ農業ステーションの小豆担当者

（パン・ダ農業ステーションの小豆への取組みに関する説明）

先にも述べたように、王室プロジェクト財団としては 1971 年に米国機関との協力の基に小豆の研究開発・栽培を開始したが、その後は目立った取り組みは行われなかったと考えられる。しかし、1996 年頃に日本の業者が小豆を入手したい旨の相談を当ステーションに持ちかけたことをきっかけとして、王室プロジェクトとしても小豆の研究・普及に再度取り組むことになった。その結果、2015 年には 400t あまりの小豆を、王室プロジェクトとして生産した（ちなみに昨年の生産量は 150t であった。）。

パン・ダ農業ステーションとしては、当該地域に適した小豆品種を探すことを目的として、台湾の小豆品種と日本のエリモ小豆との比較試験栽培に取り組んだ結果、デンプンの質はエリモ小豆のほうが良いが、当該地域の栽培に適しているのは台湾の品種であることを解明した。それを受けて、台湾品種の普及に努めたところ、収穫物の品質が相談を持ちかけた日本の業者の基準と合わなくなり、取引を中止することとなった。なお、王室プロジェクトが農家から買い入れる小豆の価格については、今年が 30 バーツ（108 円）/kg で昨年度が 20 バーツ（72 円）/kg であった。作柄の善し悪しで、価格が大きく変動することになる。

一方、王室プロジェクトの関連農家で作られた小豆であっても、農家は自由に販売できるので、もし小豆が必要ということであれば、農家と直接交渉してもらえば良いとのことであった。現在でも、王室プロジェクトが買い入れない小豆はローカル商社やお菓子会社が直接買い入れている。

なお、王室プロジェクトの開発センターは全部で 39 あり、そのうち小豆の集出荷・加工施設を有するものは２つである。この２つを合わせると 700t の小豆を出荷できることになるが、現在の２の開発センター以外でも小豆を扱う可能性は考えられるとのことであった。

竹小豆については、土壌改良にも役立つが、少数民族が従来から自から栽培して餅米に混ぜて自家消費しており、有効な商品作物にはならないと判断して王室プロジェクトとしてはこれまでも特に取り組む事はなかった。

試験圃場で栽培されているインゲン

試験圃場で栽培されている小豆

２）大豆農家（パン・ダ農業ステーション近郊）

当該地域の小豆の生産農家は、パン・ダ農業ステーションからさらに車で３時間走った所にあるので、今回は大豆農家を訪問することにした。

訪問した農家の全栽培面積は 11,200 ㎡であり、米、黒大豆を生産する農家であり、黒大豆の占める栽培面積は 1,600 ㎡となっている。この栽培面積規は、この辺りでは平均的な規模とのことであった。

黒大豆の農作業にかかる作業は全て手作業であり、収穫量は大体 1t 程度である。大豆の種子は王室プロジェクトから入手しているが、収穫物については豆乳や豆腐の加工メーカに販売しているとのことであった。

農家の大豆圃場

大豆農家の経営者

２月２１日（金）チェンマイ

１）王室プロジェクト財団：農産物集出荷場（場内の写真撮影は禁止）

当集出荷場は、王室プロジェクトで生産されたタイ北部地域の全ての生鮮農産物を集めて、選別・貯蔵・加工・包装・出荷を行う一大拠点であり、その設立からはすでに 50 年ほどが経っている。現在、ここには臨時雇用も含めて約 200 名のスタッフがおり、作物の選別、集出荷、加工、包装等の各種作業に従事している。今後は、周辺の王室プロジェクト関連施設もこの拠点に集約することが計画されている。

この施設では、残存農薬検査や農産物の調整・加工・包装に関する研究、さらには野菜残渣とミミズを活用した有機堆肥生産や生分解性プラスチック容器の研究といった環境に配慮した取組みも実施されている。

一方、この集出荷場には王室プロジェクト産品の卸売りを行う店も併設しており、当該プロジェクトで生産した小豆も店頭に出しているが、一部の健康志向の高い消費者が買っていくだけで、あまり人気はないとのことであった。以前は小豆を使ったまんじゅうを作って店頭に出したこともあるが、やはり人気がないので取りやめ、今では小豆をパン生地に練り込んだ小豆味のパンを作っている。

かつて、王室プロジェクトでは小豆の輸出についても取り組んだことがあるが、一時的な取組で終わった。現在、王室プロジェクトが小豆を集出荷する先は、基本的には国内消費用である。

王室プロジェクト集出荷場担当者との記念撮影

サツマイモや小豆を
練り込んだパン

２）民間豆類流通販売業者（LIMSAKDAKUL）

（業務内容の一般的な説明）

当社は、農家からハトムギや豆類を買い入れて、選別した上で加工工場等に販売するのが主たる業務であるが、輸出も実施している。もともとファミリービジネスとしてスタートしたが、現在では選別等の施設で 64,000 ㎡の敷地を有しており、さらに農家の畑に近いところで新しい豆類の集出荷施設を建設中である。

昨年は干ばつの影響で、自分達が買い付ける作物については例年の 20%程度の収穫量しかなかった。今年どうなるかは、これから雨期にならないと分からない。

当社が扱っている豆類に関しては、20%が国内の加工用業者に出荷しており、残りを輸出している。しかし、その品質は、日本の求めている基準には達してないので、現状では中国に輸出している。

（小豆に関する業務の説明）

このあたりの小豆農家は、昔の品種をそのまま種子として使っており、品種改良は行っていないので、1,600 ㎡当たりの収穫量は 100～200kg 程度である。以前、タイの農業局と共同で小豆の生産振興したこともあったが、うまく行かなかった。

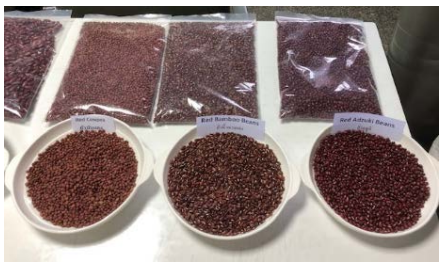
最近では、日本のある業者がこの地域の農家から小豆を買ったものの、自らが求める品質に達していなかったため、その小豆を当社が購入したということもあった。その小豆については昨年のうちに他社に転売した。この地域では、もう小豆の農家は増えないではないかと思う。

（竹小豆に関する業務の説明）

このあたりでは、竹小豆はトウモロコシとの混作で栽培している。主たる作物はトウモロコシであり、竹小豆は放っておけば良い。5 月播種、9 月収穫となっているので、今年の収穫量については、10 月になったら聞いて欲しい。

竹小豆については、タイ北部全体で凡そ 5,000t ほどの収穫量があり、当社ではそのうち 1,000t ほどを購入している。昨年度は価格が上がり、農家の収入が増えたため。今年の作付けは増えるのではないか。CIF 価格で 46 バーツ（166 円）／kg ほどであった。これについても、メインの客は中国である。

当該業者が扱う雑豆（左から、ササゲ、竹小豆、小豆）



雑豆の入った巨大サイロ

倉庫に積まれた袋入りのインゲン等雑豆

検査のためのサンプル抜き取り機

Ⅲ　調査後の感想

タイの農業は基本的には米作が中心であり、豆類については米の裏作として栽培することはあるものの、従来から戦略作物としての位置づけにはない。近年ではさらにトウモロコシ、キャッサバ、サトウキビ等の収益性の高い作物への変換が急速に進んでおり、豆類の作付面積はそれに併せて急激に減少している。これは、農家にとって、豆類の生産は労力がかかる割には収益性に劣ることが主な要因ではあるが、大規模流通業者等が生産現場を作目転換に積極的に誘導していることも関係していると思われる。

一方、行政機関においても、大豆、緑豆に関しては試験研究・生産振興等の取組は一定レベルで行われているが、インゲン、小豆、竹小豆等のマイナーな雑豆に関しては、特段の取組も行われておらず、統計的な数値も十分に把握されていなかった（特に小豆に関するデータは皆無であった。）。いんげん・小豆に関しては、過去において行政サイドでも試験研究・生産振興等に取組んだこともあったようだが、現状ではほとんど取り組まれていないようである。一方、王室プロジェクトにおいては、インゲン・小豆の生産振興にも取り組んでおり、特に小豆に関しては数年前に取組を始めたが、行政との連携は全く行われている様子はなかった。

しかしながら、タイにおける農業の持続的発展という面では、輪作体系の中に豆類を組み入れて、適切な地力保全を図りながら、今後の農業展開を図っていくことは極めて重要と考えられること、そもそも小豆や竹小豆はタイ北部の山岳部においては気候条件が適していること等から考えると、少数民族保護対策と相まって小豆等雑豆の生産振興を行政サイドと王室プロジェクトが連携して進めることは、タイにとっては意義のあることではないかと思われた。

そもそもタイ北部地域では、小豆栽培がある程度の規模で行われていたようであり、日本にもかつては 300t～400t 程度コンスタントに輸入されていた時期があったこと等を考えると、我が国にとっても小豆の輸入先の多角化、少数民族保護プロジェクトへの協力等を念頭にタイ政府や王室プロジェクトと協力して、日本への小豆等雑豆の輸入先確保の可能性を探ってみるのも無意味ではないと思われる。

一方、今回の調査では不明だったものの、山岳部における現在の小豆栽培農家の実態や、近年のタイからの小豆輸出増大の背景等についても、もし調べることができれば大変興味深い調査結果が得られるかもしれないと思われる。

いずれにせよタイにおける小豆等雑豆の潜在的な供給力に関しては、過去の生産実績、ここ数年の輸出量の急増、気候条件等の背景を考慮すると、我が国とっては無視できない面があると思われることから、必要に応じて小豆等雑豆の輸入先拠点の一つすることも念頭に置きつつ、今後ともタイにおける小豆等の雑豆生産・流通等に係る情勢に注目を続けることは重要と思われる。

Ⅳ　添付資料

１　面会者リスト

（１）農業協同組合省農業普及局

Dr. Settapong	Lekawatana	Agricultural Production System Specialist (Chairman of the meeting)
Mrs. Usa	Thongjaeng	Chief of Foreign Relations Group, DOAE
Ms. Narumon	Pahurat	Officer of Foreign Relations Group, DOAE
Ms. Chayanit	Sompuen	Officer of Foreign Relations Group, DOAE

3 Officers of Agricultural Extension and Promotion Group

（２） JETRO バンコク事務所

安田　良輔	Senior Coordinator Agriculture and Food Dept. JETRO Bankok
丸山　淳也	Chief Officer Agriculture and Food Dept. JETRO Bankok

（３） 在タイ日本大使館

梨田　和也	在タイ日本国大使
関口　　昇	公使（経済） 在タイ日本国大使館
村松　　直	一等書記官 在タイ日本国大使館

（４） タイ国トウモロコシ及び農産物取引協会

Mr. Pravit	Ariyavatkul	HT Intertrade Limited
Mr. Somkiat	Pantjitvutichai	NIM Brothers Agri Trade Co. Ltd.
Mr. Veera	Maiteng	Sahafarm Co. Ltd.
Mr. Chawalit	Tangariyakul	Chareon Pokphand Produce Co. Ltd.
Mr. Prasit	Sirimongkolkasem	P.Charoen Phan Feedmill Co. Ltd
Mr. Monchai	Srichaiyongphanich	Thai Solo and Industry Co. Ltd.
Mr. Rerngchai	Suwan	Puechphol Suwannaphum Co. Ltd.
Mr. Somchai	Srichiraratana	Hoe Thai Co. Ltd.
Mr. Supasit	Sirisate	Sirichai Intertrade Co. Ltd.
Mr. Krasian	Pandey	Gravity Intertrade Co. Ltd.

５Officers of The Thai Maize and Produce Traders Association

（５） チェンマイ畑作センター

Mr. Sutad	Pintasen	Director of Chiang Mai Field Crops Research Center
Ms. Auytin	Polpanit	Agricultural Research Officer, Senior Professional Level (Head of Research Unit)
Ms. Ratchanee	Sopha	Agricultural Research Officer, Senior Professional Level
Ms. Kallay	Withee	Agricultural Research Officer, Professional Level
Ms. Pattamaporn	Wassanacharoan	Agricultural Research Officer, Practitioner Level
Ms. Napaporn	Kamnuantip	Agricultural Research Officer, Practitioner Level
Mr. Siwakorn	Kaitmaneerat	Agricultural Research Officer, Practitioner Level
Mr. Hattawitt	Bunlaey	General Administration Officer

（６） 王室プロジェクト財団：パン・ダ農業ステーション

Mr. Puttipong	Manokam	Researcher, Department of Field Crop Research and Development
Mrs. Kanjana	Prakarn	Researcher, Department of Field Crop Research and Development
Mr. Wimol	Pansupa	Field Officer, Division of Production Promotion at Royal Agriculture Station Pangda, Department of Research and Development Center/Station

（７） 王室プロジェクト財団：農産物集出荷場

Ms. Saichom	Dhanesnitaya	Department of Public Relations, the Royal Project Foundation

（８）民間豆類流通販売業者（LIMSAKDAKUL）

Mr. Virat	Limsakdakul	Managing Director
Miss. Piyachittra	Siworakun	Deputy Managing Director
Miss. Weerawan	Suwanmongkhol	Officer, Department of International Business
Mrs. Patcharaporn	Chanpor	Officer, Department of Human Resource

２　タイ国内流通業者・輸出業者事例一覧

	業者名	国内販売	輸出	所在地
1	Thanya Farm Co., Ltd.	O		62/3 Moo 3 Bangyai, Bangyai, Nonthaburi Tel : (+66) 2-418-7111 E-mail : info@raitip.com http://www.raitip.com
2	Thai Food Industry (1964) Co., Ltd.	O		52 Soi Phetkasem 48 yak 16-2 Bangduan , Phasri - Charoen, Bangkok Tel: (+66) 2-869-5502-4, 2-467-1153 http://www.khaothong.com/
3	Siam Agri Industrial Co.,Ltd	O		119/1 Moo.7, Thamanao Road, Thamanao, Chaibadan, Lopburi Tel: (+66)81-935-2235, (+66)86-379-7055 http://xn--n3cvfqc3d7i.com/?page_id=6
4	Tang Ying Wattana Co., Ltd.	O		33/3 Moo.5, Rachathewa, Bang Phli, Samut Prakan Tel: (+66) 2 750-0781-5 Email : sales@tangying.co.th http://www.tangying.co.th/en/aboutus
5	Limsakdakul Agricultural and Industrial (Thailand) Co., Ltd.	O		309 Wongwan 2 Rd., Sanpulouy, Doisaket District, Chiang Mai Phone: +66(53)011751 Ext. 17 or 19 Email: Nuttapol@limsakdakul.com
6	Cal Intertrade Co., Ltd.	O	O	Jewelry Center Building 14th Fl., H　138/52 Rat Rd., Sephraya, Bangrak, Bangkok Tel: (+66) 2 2666 901-6, 92 348 9596 www.cal-nutri.com
7	Nanapan Agri-Industrial Co.,Ltd.	O	O	1150-1158 Songwad Road, Chakkrawat, Samphanthawong, Bangkok Tel. : (+66) 2 221 8116-20 Email : contact@nanapanagri.com http://www.nanapanagri.com/
8	Kittitat Co., Ltd.	O	O	74 Soi Bangkrade-32, Samaedum Bangkuntian Bangkok Tel: (+66) 2 896 9190 http://www.mungbean.com/mungbean.com/Welcome.html

3　タイ国内に流通する乾燥豆・豆菓子等の事例一覧

1. 緑豆					
	商標	Raipup		商標	Khaothong
	含有量（g）	500		含有量（g）	500
	価格（THB）	30.50-46（店による）		価格（THB）	32－34.5（店による）
	供給元	Thanya Farm Co., Ltd		供給元	Thai Food Industry (1964)
	商標	Nature Zone		商標	Lotus
	含有量（g）	400		含有量（g）	500
	価格（THB）	75		価格（THB）	32
	供給元	Ko Sawanyakorn Shop		供給元	Tawanproduce Co., Ltd.
	価格	THB80/kg		価格	THB60/kg
	供給元	Phothong Shop, Or.tor.kor. Market		供給元	Eairt Long Import-Export Co., Ltd., Or.tor.kor. Market
2. タケアズキ					
	商標	Raipup		商標	Khaothong
	含有量（g）	500		含有量（g）	500
	価格（THB）	34.50 - 46		価格（THB）	34
	供給元	Thanya Farm Co., Ltd		供給元	Thai Food Industry (1964)
	商標	Nature Zone		価格	THB60/kg
	含有量（g）	400		供給元	Eairt Long Import-Export Co., Ltd., Or.tor.kor. Market
	価格（THB）	75			
	供給元	Ko Sawanyakorn Shop			
3. ササゲ					
	商標	Tesco Organic		商標	N&P
	含有量（g）	150		含有量（g）	180
	価格（THB）	45		価格（THB）	31
	供給元	Good Food Good Health Co., Ltd.		供給元	National and Premium food co., Ltd.
4. インゲン豆					
	商標	T&J		商標	MICA（缶詰）
	含有量（g）	150		含有量（g）	400
	価格（THB）	53		価格（THB）	49－55（店による）
	供給元	Swannachat Co., Ltd		供給元	MICA
5.スナック類					
	豆種類	緑豆		豆種類	緑豆
	商標	MICA		商標	Pela
	含有量（g）	42		含有量（g）	120
	価格（THB）	10		価格（THB）	25－26（店による）
	豆種類	緑豆		豆種類	ヒラマメ
	商標	Kub Kaem		商標	Yamata
	含有量（g）	40		含有量（g）	70
	価格（THB）	25		価格（THB）	40

４　民間豆類流通販売業者（LIMSAKDAKUL）プレゼン資料の抜粋

LIMSAKDAKUL
Agricultural Industrial (Thailand) Co.,Ltd.

Manufacturing and Trading of Agriculture Products

Limsakdakul Agricultural Industrial Co., Ltd.
309 Wongwan 2 Rd., Sanpulouy, Doisaket District,
Chiang Mai, Thailand 50220
Tel: +66(53)011751 Ext. 17 or 19
Website: www.Limsakdakul.com

Background of the Company

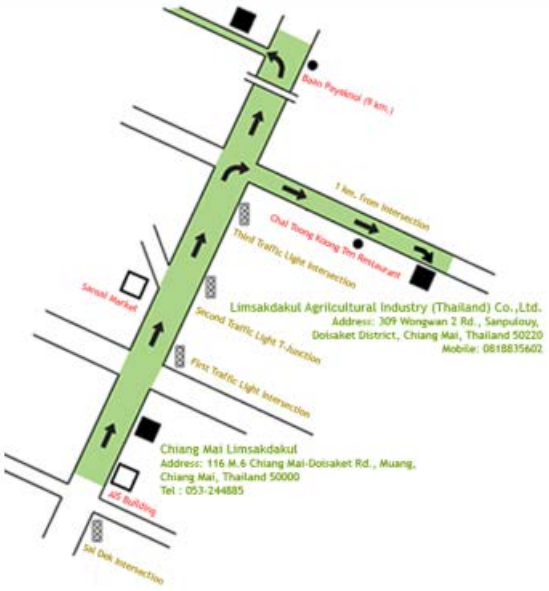
Since 1957, Limsakdakul Agricultural and Industrial (Thailand) Co., Ltd. has been well-established for more than 50 years in agro-trading business in Chiang Mai province and other provinces in northern Thailand. From the beginnings, we were the local grain trader, mainly soybean, and supplier for soy sauce, soymilk, and cooking oil manufactures.

Background of the Company

In 2004, we have started new factory and warehouse in 14 acres land on outskirt of Chiang Mai. The new facility including 3 large warehouses, 5 silos with total capacity of 12,000 MTS for grains storage. We have set up new state of art machine to handle in drying machine, gravity machine and colour sorting machine. Our venture continue in many kind of grains, pulses and cereal that keep machine running in full capacity to support all demand from local and worldwide customers.

In 2013, animal feed production line has started. We have brought new extruder machine and all new production lines to produce full fat soybeans to fulfill demand in animal feed sector under brand “One feed”. This product become one of our core business which provide high quality feed material for big feed mill factory in Thailand and many farms around Northern part of Thailand.

Map of the Company



Current Products

- Soybean, Job's-tears (Pearl Barley), Black Sesame, White Sesame, Red Kidney Bean, Corn, Green Mung Bean, etc.

Current Business Operation

- The company develops and selects high quality grains and maize to supply to soymilk, cooking oil, tofu, soy sauce, processed soy products producers, and traders in domestic and overseas.
- The company currently started business operation in animal feed industry by producing Fullfat soy as raw-material for animal feed production.
- The company installed Extruder Machine from Andritz Sprout, Spain. The production capacity is 5 tons/hr. The machine operation has been started since July 2013.

Production and Export of the Company

- The company exports corn, Job's-tears, and beams to overseas such as Japan, South Korea, Taiwan, China, Vietnam, Malaysia, Indonesia, UK, UAE, and Hong Kong. The export value is worth more than 6 million USD annually.
- The company also exports Hatomogi, Yokuinin, Red Bamboo Beans, Red Adzuki Beans, and Black Beans to Japan.

THANK YOU

Limsakdakul Agricultural Industrial (Thailand) Co.,Ltd

309 Wongwan 2 Rd., Sanpulouy, Doisaket District, Chiang Mai, Thailand 50220

Tel: 081-7831358 , 053-011751-2 **Fax:** 053-011753

www.limsakdakul.com , e-mail : nuttapol@limsakdakul.com

5　タイの市中風景

（1）バンコク

バンコクの交通事情

バンコクは、とにかく車の渋滞で有名。1999 年 12 月にスカイトレイン（高架鉄道）が、開通して若干緩和したといっても、このありさま。車での移動は時間が読めない。

バンコクのスワンナプーム空港付近の市中バザー

100 ㎡のスペースの簡易施設の中で、食料品・日用品がところ狭しと売られており、近隣のタイ人住民で大変な混雑をしていた。

タイ人は、宝くじが大好き。これは、市中バザーの前の露店で売られていた宝くじ。皆さん熱心に当たり札を吟味中。

タラート・タイ市場の果物センター外観

果物専門の卸売りセンター。綺麗に整備された大きな建物が印象的。

タラート・タイ市場付近のブッダの像

このようなブッダの像が、街中のあちこちに見かけられる。熱心な仏教徒であるタイ人が花等のお供え物を絶やすことはない。

ワット・ポーの仏塔

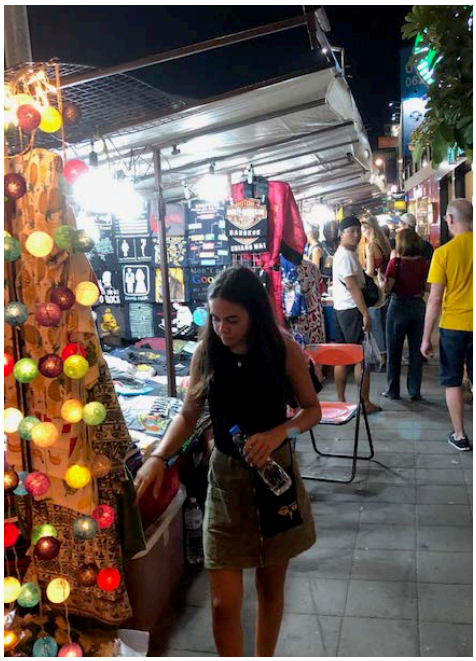
バンコクで一番大きく、一番古い寺院であるワット・ポーの中にある仏塔。チャクリー王朝歴代の王の遺骨が納められていると言われている。

ワット・ポーのブッダ涅槃像

この涅槃像は、お釈迦様が亡くなる前に、お弟子さんたちに最後の説教をしている姿といわれている。世界各国からの観光客が溢れていた。

（2）チェンマイ

チェンマイ市のナイトバザー



チェンマイの中心街では、毎晩夜の 6 時ごろから、露天商が衣類や土産物を観光客相手に販売している。その規模は 1ha 程度にも及ぶ。

ムアン・マイ市場のゴミ回収風景

ムアン・マイ市場の路上販売店の前を回ってゴミ回収する巨大な黄色いトラック。店と店の間をぎりぎりで通過してゴミを回収。

タイ北部山岳部の少数民族

伝統的な民族衣装に身を包んだタイの山岳北方民族。今でも、いろいろな少数民族が山岳部で生活している。

北部民族の伝統舞踊

悲しい歴史を持つ北部タイ民族の伝統舞踊。その繊細で優雅な踊りが、観光客を魅了する。

ワット・パーダーラーピロム

チェンマイにある寺院。1938 年に巡礼に訪れた修行僧が建立したとされる。色とりどりの風鈴が敷地のあちこちに張り巡らされており、旅情をそそる美しい音色を奏でていた。

ワット・パーダーラーピロム

ワット・トン・グウェン

チェンマイ郊外の小さな寺。地元では有名だが、外国人観光客は少ない。1858 年に建立された美しい木造建築で、落ち着いた佇まい。

5　ジェトロ・バンコク事務所提供資料（タイの一般情報）

参考資料・データ

Copyright © 2019 JETRO. All rights reserved. 禁無断転載

01 タイの基本情報｜3 タイにおける高齢化社会への対応　JETRO Bangkok

｜タイにおける高齢化への対応

○ タイ国の出生率は約1.5であり日本（同約1.4）と同様低い水準となっている。今後10年から20年程度でタイも高齢化社会に移行。

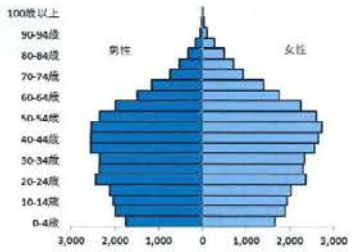
○ 今後は、高齢者向け商品や介護商品の需要が高まることが予想されるとともに、健康意識も高まることが予想される。

○ 日本と同様、高齢者向け食品や病院・介護食品の需要が高まると思われ、当該分野で先行している日本の食品加工技術が注目されている。

○ またタイ人女性は美容、特に美白に拘る傾向が強いと言われており、美容を意識した機能性食品も期待。

タイ

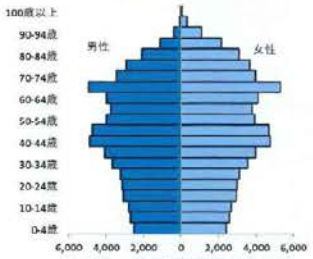
人口：6,618万9千人
20歳未満：23.3%
65歳以上：10.5%
人口増加率(注)：2.7%



（出所）：タイ国家統計局（2017年）
（注）人口増加率：2012－2017年間の年平均増加率、図の単位は全て千人

日本

人口：1億2686万人
20歳未満：22.0%
65歳以上：27.4%
人口増加率(注)：-0.51%



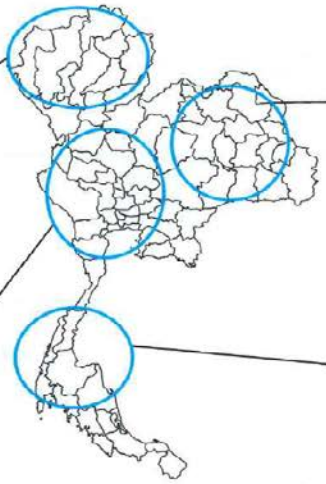
（出所）：総務省統計局（2017年）
（注）人口増加率：2012－2017年間の年平均増加率、図の単位は全て千人

Copyright © 2019 JETRO. All rights reserved. 禁無断転載

○ タイの季節は、①雨季（６月～１０月）、②乾期（１１月～２月）　③暑季（３月～５月）
○ 広大で比較的平坦な国土・農地と温暖な気候を活用し、農林水産物を生産
○ 地域毎に、気候・土壌等の特性にあわせ、特色ある品目を生産

Ⅰ　タイ北部
・**特徴**：山岳部・比較的冷涼な気候
・**主な農産物**：米、**日本米（短粒種）**、とうもろこし、**野菜、果実**
・**主な加工工場**：冷凍野菜・加工野菜工場

Ⅱ　タイ中央部
・**特徴**：チャオプラヤ川デルタ地域で肥沃な土地。アジア有数の稲作地帯。灌漑が整備。
・**主な農産物**：**米（二期作、長粒種）**、とうもろこし、さとうきび、キャッサバ、**畜産**（ブロイラー、卵、豚肉）、果実
・**主な加工工場**：畜産物加工場、食品加工業



Ⅲ　タイ東北部（イサーン地方）
・**特徴**：痩せた土地。台地状で水不足。灌漑施設が少なく天水依存。塩害。開発が遅れる。低所得。
・**主な農産物**：**ジャスミン米（香米）**、もち米、とうもろこし、**キャッサバ、サトウキビ**
・**主な加工工場**：製糖工場、キャッサバ工場

Ⅳ　タイ南部
・**特徴**：アンダマン海とタイ湾に囲まれた山岳部
・**主な農産物**：天然ゴム、アブラヤシ、パイナップル、エビ養殖
・**主な加工工場**：ツナ工場

出所：　関係機関へのヒアリング調査を元にジェトロ・バンコク事務所作成

Copyright © 2019 JETRO. All rights reserved. 禁無断転載

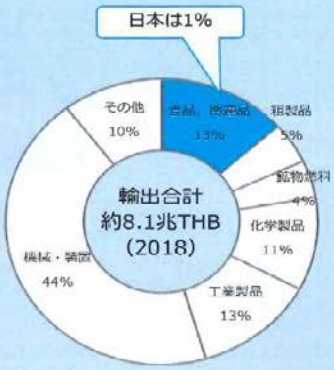
01 タイの基本情報｜2 タイの気候と農林水産業概要　JETRO Bangkok

○ 産業別GDP構成比では農林漁業は1割弱にすぎないが、輸出の１割強、就業者別で全体の3割強を占め、農林漁業は依然として、タイにとって最も重要な産業の一つ。

○産業別GDP構成比（2018）

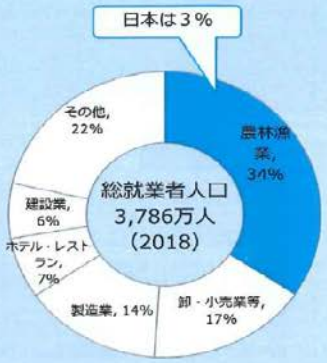
資料：国家経済社会開発委員会（NESDB）より作成。なお、内閣府統計によると、日本の産業別の構成比（2017）は、農林漁業１%、製造業21%、建設業６%、卸小売14%、金融４%、不動産11%、運輸郵便５%、情報通信６%などとなっている。

○品目別輸出額構成比（2018）



資料：タイ中央銀行データベースから作成
食品関連品には、動物・植物油脂、飲料、たばこ等も含む。

○産業別就業者構成比（2018）



資料：労働力調査より作成。
なお日本の労働力調査によると、日本の就業者の産業別構成（2017年）は、農林漁業３%、製造業16%、建設業８%、卸・小売16%、宿泊・飲食６%、医療・福祉12%などとなっている。

Copyright © 2019 JETRO. All rights reserved. 禁無断転載

｜タイにおける牛肉輸入・流通・消費事情①

○ 日本産牛肉の輸入解禁（2011年４月）以降、**タイ向け日本産牛肉の輸出は急拡大**（従来、我が国での口蹄疫発生により輸入禁止）。主に高級焼肉・しゃぶしゃぶ店、日本食レストラン等で提供。

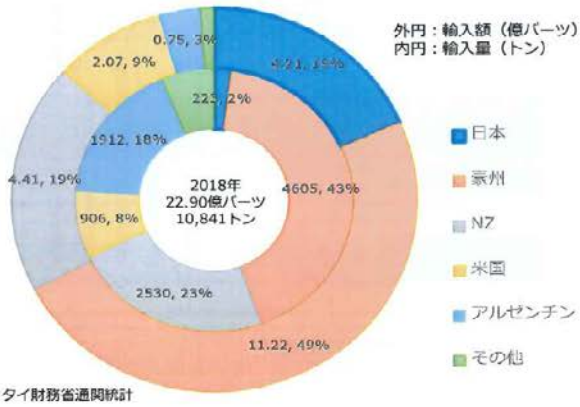
○ 主に豪州、NZから輸入。**日本は第6位の輸入先国でシェア(2%)は低い**が、**高級牛肉として「和牛：WAGYU」ブランドの認知度は高い。**

○ 高価格の**日本産牛肉は豪州産**（オージーWAGYU、オージービーフ）**と競合。**

○日本産牛肉のタイ向け輸出

財務省：貿易統計
冷凍(020230)・冷蔵(020130) の合計
括弧内はＨＳコード

○タイの牛肉輸入



タイ財務省通関統計

Copyright © 2019 JETRO. All rights reserved. 禁無断転載

｜タイにおける牛肉輸入・流通・消費事情②

○ タイ向け輸出には、と畜場の認定等、所要の条件・手続きが必要。

○ ＪＴＥＰＡ（日タイ経済連携協定）の申請・適用により、関税負担は大幅減少**（50%→0%。2014年4月以降）**

○ タイでは伝統的に牛肉消費は一般的でなかった（宗教的理由等）が、近年、牛肉消費も増加。

<タイ向け日本産牛肉の輸出条件の概要>

○ と畜場の主な条件
- 都道府県等による選定手続きを経て、厚労省による確認後、タイ政府に通知されていること　等
- 【**７０施設**が対タイ輸出食肉取扱施設として認定済（2019年４月現在）】 https://www.mhlw.go.jp/topics/haccp/other/yusyutu_syokuniku/taithai.html

○ 動物検疫所での**輸出検疫**　等

<農水省・厚労省発表資料>

○日本産牛肉の対タイ輸出に係る関税

WTO税率	50　%
JTEPA適用時(要申請)	
2007年JTEPA発効以降	段階的削減
2014年4月以降	0%

ＪＴＥＰＡ（日タイ経済連携協定）ＡＮＮＥＸ１
Section2"schedule of Thailand"
ＨＳコード0201、0202

○タイの牛肉消費

- 肉類の中では鶏肉(12.2kg/人・年)　豚肉(13kg)の消費が多く、**牛肉消費(2.6kg)は比較的少ない。**
出所：https://www.helglilibrary.com/indicators/
- **一部の住民**は、宗教的理由（観音信仰の戒律）により、**牛肉を食べない。**
- タイ人富裕層（華僑系が多い）は**サシの入った和牛を好む。**
焼肉・鉄板焼き、しゃぶしゃぶなどの牛肉料理を提供するレストランも人気。

○牛肉小売価格の例

牛肉産地・部位	価格(B/kg)	比率
日本産牛肉　サーロイン	9, 950B	1
日本産和牛　肩ロース	9, 900B	―
豪州産WAGYU　サーロイン	3, 790B	0. 4
タイ産牛肉(タイフレンチ)ヒレ	1, 590B	0. 15

ＪＥＴＲＯ「バンコク都内スーパーマーケット市場調査(2013年4月)」より

Copyright © 2019 JETRO. All rights reserved. 禁無断転載

｜タイへの青果物輸出

○ 日本産の青果物は食味の良さと品質の高さが評価されており、タイの富裕層によって購入されている。

○ 価格が安い中国産、韓国産、オーストラリア産、米国産等と競合している。

○日本産青果物のタイ向け輸出

品目	単位	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
リンゴ(生鮮)	千円	129,688	157,328	144,040	200,000	173,822	222,543	394,837
	KG	249,579	282,160	247,074	329,000	267,134	493,395	994,863
柿(生鮮)	千円	112,437	142,993	183,977	180,410	118,239	201,504	229,773
	KG	303,815	306,760	373,250	358,562	228,447	367,338	383,309
なし(生鮮)	千円	6,369	14,789	10,954	7,140	9,462	15,303	16,319
	KG	11,982	25,062	16,566	11,626	16,035	29,280	29,188
うんしゅうみかん(生鮮・乾燥)	千円	3,207	10,701	12,379	11,282	9,357	14,173	23,724
	KG	6,330	20,800	20,260	16,896	11,624	20,146	37,970
桃(生鮮)	千円	1,589	4,070	4,410	5,440	24,005	23,249	22,255
	KG	1,590	2,953	3,601	5,324	29,111	32,840	26,160
ぶどう(生鮮)	千円	1,473	5,254	7,325	9,806	25,800	35,554	68,891
	KG	949	2,595	3,644	4,109	10,298	14,369	22,876
いちご(生鮮)	千円	829	2,386	6,455	17,921	31,713	36,988	104,017
	KG	217	874	2,403	6,254	11,469	13,643	36,409

出所： 日本財務省 貿易統計

Copyright © 2019 JETRO. All rights reserved. 禁無断転載

02 日本からタイへの輸出状況｜4 品目別動向（米、牛肉、青果物、緑茶、酒、水産物、菓子類） JETRO Bangkok

｜タイにおける果物輸入・流通・消費事情

○ タイ向け輸出として**日本産果物は人気**があるが、一方で**タイ産、中国や韓国産などの第三国産**のものも店頭で並ぶなど、競争が**激しい**。

○ 特にバンコク都内の消費者は自宅調理をしない人が多いが、果物であればそのまま食べられるので**広い消費者層に好まれる**。

○ ミカンは検疫上の問題から、一部の産地の物しか輸入が認められていない。

Copyright © 2019 JETRO. All rights reserved. 禁無断転載

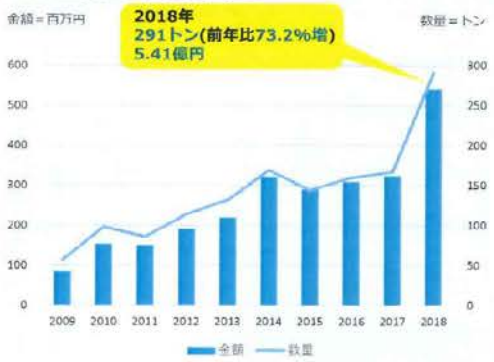
｜タイへの緑茶輸出

○ タイでは2004年頃から緑茶飲料が人気、現在コンビニでも緑茶飲料が大きな売場面積を占める。ブーム当初は加糖された甘みの強いものしかなかったが、最近は健康志向の高まりにつれ微糖および無糖のものが増加。

○ 販売先は主に緑茶飲料工場および日本食レストラン。

○ 緑茶はタイでは関税割当品目となっており、事前に商務省外国貿易局から輸入許可を取ることが必要。

○日本産緑茶のタイ向け輸出



出所： 日本財務省 貿易統計

○2017年タイの緑茶輸入

単位： 数量＝トン、金額1,000バーツ、単価＝バーツ/キロ

国名	数量	金額	単価
日本	283	135,759	480.15
中国	2,612	70,568	27.02
ミャンマー	915	15,757	17.23
ベトナム	84	13,600	161.18
スリランカ	9	7,220	810.78
その他	34	22,722	675.31
合計	3,936	265,625	67.49

出所： タイ関税局 貿易統計

○日本産緑茶のタイ向け輸出に係る関税

関税割当内： 30%　関税割当外： 90%
JTEPA適用時(要申請)： 2017年11月以降0%

出所： ＪＴＥＰＡ（日タイ経済連携協定）ＡＮＮＥＸ１ Section2"schedule of Thailand" ＨＳコード 0902.10, 0902.20 タイ関税局 HSコード： 0902.10, 0902.20

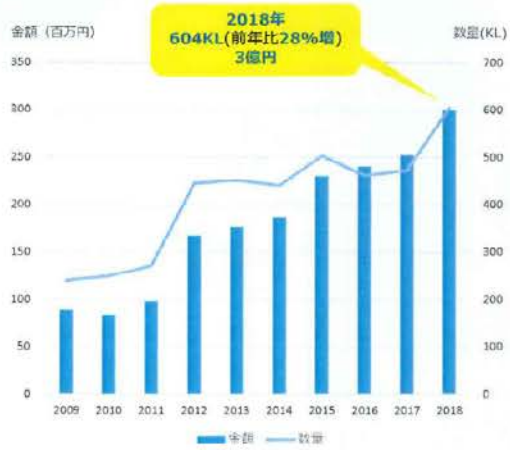
Copyright © 2019 JETRO. All rights reserved. 禁無断転載

02 日本からタイへの輸出状況｜4 品目別動向（米、牛肉、青果物、緑茶、酒、水産物、菓子類） JETRO Bangkok

｜タイにおける日本酒・焼酎の輸入・流通状況①

○ 日本酒・焼酎は、従来は、日本人駐在員等が消費の中心であったが、**最近は、日本食の普及、日本食レストランの増加に伴い、タイ人富裕層・中間層にも徐々に認知**されてきている。

○タイ向け日本酒の輸出の推移



○タイ向け焼酎の輸出の推移

財務省：貿易統計　（ＨＳコード　清酒　220600200　焼酎220890100）

Copyright © 2019 JETRO. All rights reserved. 禁無断転載

｜タイにおける日本酒・焼酎の輸入・流通状況②

○ 飲酒に対して日本より厳格であり、各種規制が課せられている。

○ 酒類にかかる諸税は非常に高いが、ＪＴＥＰＡ（日タイ経済連携協定）の申請・適用により関税負担は大幅減少（**清酒0%、焼酎・ワイン0%**）

○酒類に対する嗜好・市場動向

・ 嗜好：アルコールの氾濫を防ぐため法律で厳しく規制されており、飲酒に対して日本よりも厳格。

・ **酒類消費は圧倒的にビールが多い**（シンハービール、チャンビール、レオビール、ハイネケン等）。日系ではアサヒビール（タイ生産）、サッポロビール（ベトナム生産）、キリンビール（タイ生産）が進出。

・ 次に、スピリッツ類消費が多い（タイ産焼酎等）。最近は、バンコクを中心に、所得増加、食の洋風化・多様化に伴い、ウイスキー、ワイン、日本酒、焼酎、梅酒などの消費が増えてきている。ワイン専門店やワインをテーマとしたレストランも人気となっている。

○酒類の各種規制（概要）

・ 広告規制： 販売促進につながる行為の禁止
　＞雑誌等の印刷物の広告に、酒類を写してはならない
　＞Web広告・SNS等にも飲酒を想起させるような写真、酒類は写してはならない
　＞小売価格からのディスカウント禁止
　＞ポップ広告、試飲等プロモーション活動も禁止

・ 販売規制： １１時～１４時、１７時～２４時以外の時間帯は、コンビニ・スーパー等の小売店での販売禁止（ホテル・レストラン等での提供は可能）、一部の祝日等で販売禁止

・ 輸入規制： **１銘柄１業者登録制**

Copyright © 2019 JETRO. All rights reserved. 禁無断転載

02 日本からタイへの輸出状況｜4 品目別動向（米、牛肉、青果物、緑茶、酒、水産物、菓子類） JETRO Bangkok

｜タイへの水産物輸出

○ 日本食レストラン増加に従い主食用日本産水産物の輸入も増加している。**空輸で輸入された日本産水産物を使っているレストランも多数。**

○ タイ人が好む寿司ネタはトロ、サーモン、サバなど脂がのったもの。**淡泊な白身魚は寿司ネタとしてはあまり人気が無い。**

○日本産水産物のタイ向け輸出

品目	単位	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
かつお(冷凍)	百万円	3,723	5,928	4,664	2,390	673	2,912	4,881
	トン	23,927	31,592	30,967	15,758	4,411	13,965	30,277
びんながまぐろ(冷凍)	百万円	3,207	2,399	3,465	3,775	2,316	2,614	3,436
	トン	12,659	11,816	12,740	10,815	7,524	8,526	10,347
さば(冷凍)	百万円	2,021	2,588	2,713	4,608	3,330	2,736	3,919
	トン	25,991	24,468	26,084	53,680	43,207	32,269	40,709
さけ(冷凍)	百万円	1,459	1,304	1,195	1,144	1,273	1,136	1,053
	トン	5,627	5,518	4,194	3,364	3,895	2,573	2,414
いわし(冷凍)	百万円	1,101	3,422	418	1,091	1,083	1,787	3,273
	トン	18,026	46,771	5,432	14,147	15,138	26,311	49,586
さんま(冷凍)	百万円	261	311	136	124	139	226	307
	トン	3,006	3,915	1,101	780	487	1,463	2,027

出所： 日本財務省 貿易統計

Copyright © 2019 JETRO. All rights reserved. 禁無断転載

02 日本からタイへの輸出状況｜4 品目別動向（米、牛肉、青果物、緑茶、酒、水産物、菓子類）

JETRO Bangkok

｜タイにおける菓子類の輸入・流通状況

○ 日本産の菓子は食味の良さと品質の高さが評価されており、在タイ邦人およびタイの富裕層によって購入されている。

○ 価格が安いタイ現地産、中国産等と競合している。

○日本産菓子類のタイ向け輸出

品目	単位	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
チョコレート菓子	千円	534,006	182,707	252,884	327,877	319,967	268,949	244,738
	KG	462,015	126,035	186,592	244,929	228,200	172,613	137,857
米菓（あられ・せんべい）	千円	46,951	63,159	50,643	68,374	52,788	56,588	60,385
	KG	34,156	41,435	34,800	45,278	37,405	40,305	44,217
アイスクリーム等氷菓	千円	26,417	24,338	72,274	55,274	146,373	231,101	183,867
	KG	50,294	43,338	170,299	128,103	356,940	487,911	396,170

出所：日本財務省 貿易統計

Copyright © 2019 JETRO. All rights reserved. 禁無断転載

03 日本食レストラン（外食産業）｜参考：タイのローカル飲食店

JETRO Bangkok

屋台、フードコート、大衆食堂など。中間所得層および低所得層の消費者が日常的に利用している。

1食あたり50～70バーツ。

Copyright © 2019 JETRO. All rights reserved. 禁無断転載

｜タイと日本の小売業　分類

	タイ	日本
Modern Trade **近代的流通（MT）** 近代的小売りとは、スーパーマーケットやコンビニエンスストアなど、チェーン型や大型の現代的な小売業者を指す。日本のような近代国家では、流通の大半が近代的小売りで占められているが、アジアは国ごとにその構造が異なる。	**Hypermarket** ハイパーマーケット	**GMS（General Merchandise Store）** イオン、イトーヨーカ堂など
	Supermarket スーパーマーケット	**スーパーマーケット** ダイエー、マルエツなど
	Convenience store コンビニ	**コンビニ** セブンイレブン、ローソン、ファミマなど
	Department store デパート	**百貨店** 三越、伊勢丹、高島屋など
	Category killer カテゴリーキラー	**ドラッグストア、ホームセンター、専門店、その他** マツモトキヨシ、カインズ、家電量販店、セレクトショップなど
Traditional Trade **伝統的流通（TT）** 伝統的小売りとは、昔ながらの市場や商店街、家族経営型の小さな小売店を指す。	**卸売市場** 各地方の中心地に存在する	**卸市場** 各地方の中心地にある大きな市場
	商店 商店街・家族経営の商店など	**商店** 駅前商店街、個人商店など

Copyright © 2019 JETRO. All rights reserved. 禁無断転載

｜Modern Trade近代的流通（MT）主要小売店　（※2019年10月時点）

Hypermarket
ハイパーマーケット

- Big C Supercenter (147)
- Big C Extra (16)
- Big C Jumbo (3)
- Makro (129)
- Tesco Lotus Hypermarket (128)
- Tesco Lotus Compact Hyper (28)
- Tesco Lotus Extra (12)

Supermarket
スーパーマーケット

- Tesco Lotus Supermarket (194)
- TOPS Market (114)
- Maxvalu (76)
- Big C Market (60)
- Villa Market (34)
- Food Land Supermarket (23)
- Lemon Farm (15)
- Gourmet Market (14)
- Central Food Hall (10)
- UFM Fuji Super (4)

Convenience store
コンビニ

- 7-11 (11,299)
- Tesco Lotus Express (1,557)
- Family Mart (1,138)
- Mini Big C (671)
- CP Fresh Mart (417)
- 108 Shop (126)
- Lawson 108 (124)
- TOPS Daily (72)

Copyright © 2019 JETRO. All rights reserved. 禁無断転載

06 日本食材・食品の販売（小売）｜2 タイの主な小売店

JETRO Bangkok

｜Modern Trade近代的流通（MT）主要小売店　（※2019年10月時点）

Department store
デパート

- Robinson (48)
- The Mall (9)
- Central (1)
- Central World (1)
- Zen (1)
- Icon Siam (1)
- Siam Paragon (1)
- The Emquartier (1)
- Central Embassy (1)
- Tokyu (1)
- Isetan (1)
- Takashimaya (1)

Shopping Mall
ショッピングモール

- Central Plaza (~15)
- Central Festival (5)
- Terminal21 (3)
- MBK Center (1)
- MEGA bangna (1)
- Union Mall (1)
- Platinum Fashion Mall (1)

Category killer
カテゴリーキラー

- Watsons (523)
- Se-ed Book Center (357)
- Boots (282)
- Pure by Big C (138)
- Power Buy (103)
- Home Pro (94)
- B2S (83)
- Office Mate (71)
- THAI Watsadu (46)
- ASIA Books (44)
- Super Sport (41)
- Matsukiyo (34)
- TSURUHA (21)
- Kinokuniya (3)
- IKEA (2)
- @Cosme Store (2)
- Don Don Donki (1)
- トンロー日本市場 (1)

Copyright © 2019 JETRO. All rights reserved. 禁無断転載

04 日本食材・食品の販売（小売）｜3 主なデパートとスーパーマーケットのロケーション

JETRO Bangkok

｜主なデパートとスーパーマーケットのロケーション

①サイアムパラゴン　②セントラルワールド　③伊勢丹　④セントラルチットロム
⑤エンポリアム　⑥エムクォーティエ　⑦フジスーパー1号店　⑧フジスーパー2号店
⑨フジスーパー3号店　⑩フジスーパー4号店　⑪高島屋（Icon Siam）　⑫ドンキモール トンロー
⑬トンロー日本市場

Copyright © 2019 JETRO. All rights reserved. 禁無断転載

｜日本産食品の販売を担う日系飲食料品小売店

フジスーパー
出店年：1985年　　店舗数：4店舗
日本人駐在員とタイ人中間層・富裕層向けスーパー。「日本の普通のスーパー」を目指し、豊富な日本食材を取り揃える。

伊勢丹
開業年：1992年　　店舗数：1店舗
在タイ日本人の他、タイ人富裕層を対象に、衣服、雑貨、日本産食品等を取り扱う。5階には、日本食材やタイのお土産を販売するイセタンスーパーマーケット、デパ地下を彷彿とさせるお惣菜コーナーがある。日本の物産展の開催もされている。

ヴィラ マーケット
出店年：1973年　　店舗数：34店舗
在住外国人とタイ中間層・富裕層を対象に、通常消費される海外食材を販売、高級輸入食材はかなり多い。

Copyright © 2019 JETRO. All rights reserved. 禁無断転載

｜高級デパート

セントラル・グループ
1947年に開業し、30以上のデパートの店舗運営をしている財閥系大手企業。セントラル・ワールド：2006年に開店し、バンコクの中心街にあるショッピング・モールである。世界で11番目に大きいショッピングモール。

トップス・スーパーマーケット
セントラルグループのスーパーマーケット。セントラル・デパートの全ての店舗に入店している。デパート以外にも、商業施設などに出店している個別店舗もある。

Copyright © 2019 JETRO. All rights reserved. 禁無断転載

｜高級デパート

ザ・モール・グループ
1981年に開業。バンコクの中心を走るスクンビット沿線にある、大型ショッピングモールを運営する百貨店経営大手。タイ国内でサイアムパラゴンやエンポリアム、エムクオーティエなど11のデパートを所有。

サイアムパラゴン：バンコクの中心街サイアムエリアにある高級デパート。海外高級ブランドから一般向けのフードコート、東南アジア最大級の水族館もある巨大ショッピングモール。

エンポリアム・エムクオーティエ：エンポリアム1997年に開店、エムクオーティエ2015年開店。BTSのプロンポン駅直結。在タイ日本人が多いトンロープロンポンエリアからも近い。外国人、タイ富裕層向け。

サイアム高島屋（アイコンサイアム）
チャオプラヤー川西岸エリアに開業した大型商業施設アイコンサイアム内に併設する。高級ブランドから生鮮食品まで幅広い商品を展開。

Copyright © 2019 JETRO. All rights reserved. 禁無断転載

｜新しくオープンした日本食材取り扱い店

トンロー日本市場
2018年6月にJALグループの航空関連商社であるJALUXが開業。鮮魚、牛肉、野菜、果物をバンコクに直送する。現地日本食飲食店、小売店に提供する他、午後はB to C向けにも販売。

ドンキモール トンロー
タイ1号店として、2019年2月末にオープン。既に3店舗を展開しているシンガポールと同様に"東南アジア"仕様の業態となっている。生鮮品（精肉、鮮魚）を含む食品、日用雑貨を取り扱う他、スポーツ施設やカラオケ店、その他専門店や飲食店のテナントが入る商業施設となっている。

Copyright © 2019 JETRO. All rights reserved. 禁無断転載

｜コンビニ

セブンイレブン
財閥系コングロマリット企業CPグループと合弁契約を結んでおり、その店舗数は、国内一位を誇る。2017年に1万店を突破し、現在は11,299店舗（2019年10月時点）。

ファミリーマート
2012年、タイ国内における店舗展開を加速させるため、タイ最大の小売財閥最大手セントラルグループと提携。現在店舗数は、1,138店舗（2019年10月時点）。

Saha Lawson, Co., Ltd
株式会社ローソンとタイの消費財最大手サハグループの合弁会社。2012年設立。店舗数は、124店舗（2019年10月時点）。

Copyright © 2019 JETRO. All rights reserved. 禁無断転載

Copyright © 2019 JETRO. All rights reserved. 禁無断転載

｜展示会と商談会の実施

（参考）THAIFEX展示会の概要

○ 見本市概要

- 日　　程：　2019年5月28日～6月1日（5日間）
- 会　　場：　IMPACT Exhibition Center
- 来場者数：　67,136人（2019年）
- 出展者数：　2,745社（42カ国）（2019年）

○ジャパンパビリオン（ジェトロ主催）

- 日　　程：　2019年5月28日～ 6月1日（5日間）
- 出展者数：　72社・団体（2019年）
- 出品物　：　和牛、水産物・水産加工品、菓子、調味料、茶、酒類等

写真：　ジェトロ撮影「2019年度THAIFEX展示会」

Copyright © 2019 JETRO. All rights reserved. 禁無断転載

（参考） JETROの取組み｜1 展示会と商談会の実施

｜展示会と商談会の実施

（参考）食品・農水産物商談会

バンコク日本産農水産物・食品輸出商談会

日　程	：	2019年10月9日（水）
場　所	：	ソフィテル・スクンビットホテル (タイ、バンコク)
出展企業	：	33社・団体（2019年）
来場バイヤー数	：	132社　262人（2019年）
主　催	：	ジェトロ

写真：ジェトロ撮影「2019年度　バンコク日本産農水産物・食品輸出商談会」

Copyright © 2019 JETRO. All rights reserved. 禁無断転載

｜日本産食材サポーター店認定制度

海外における
日本産食材サポーター店認定制度

良質で安全な、日本の食材とお酒等を世界の人々に伝える。
この取り組みに共感し、世界各地から発信してくれるパートナーを募集しています。

◆ **日本産食材サポーター店認定制度とは？**

日本の農林水産省が策定した「海外における日本産食材サポーター店の認定に関するガイドライン」に基づき、民間事業者の持つ多様なネットワークを通じた海外需要や販路の拡大を目指す。**民間団体等が自主的に、日本産食材を積極的に使用する海外の飲食店や小売店等を日本産食材サポーター店として認定。**

JETROは運用・管理団体として認定団体の認定店の拡大を支援し、各種既存事業との連携を図る。
2018年までにサポーター店3,000店認定目標
※2018年3月1日時点で認定数2,628店舗

Copyright © 2019 JETRO. All rights reserved. 禁無断転載

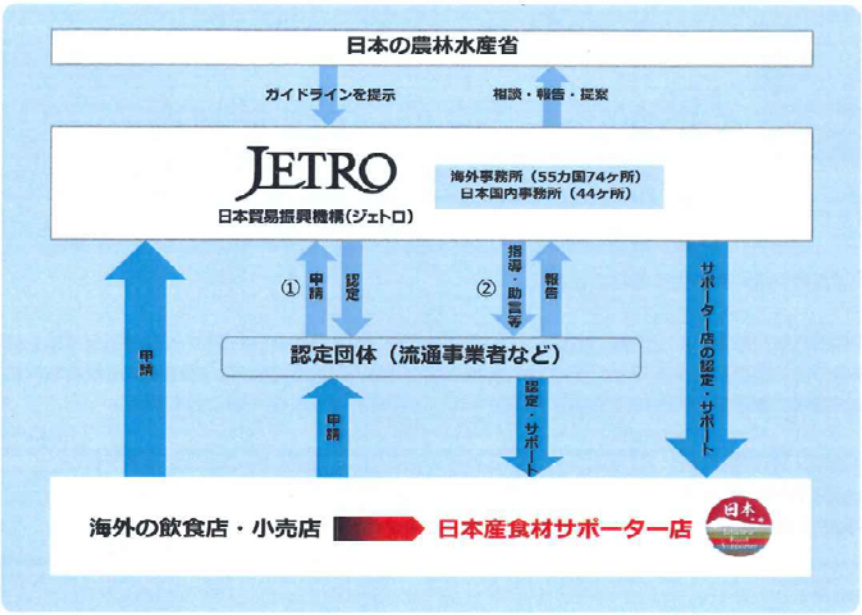
（参考） JETROの取組み｜2 日本産食材サポーター店認定制度 JETRO Bangkok

サポーター店認定要件	
海外の飲食店	**①日本産食材等の使用：** 日本産食材を使用した料理を常に提供している又は日本産酒類を専門店として提供していること。
	②メニューにおける日本産食材等の使用の表示： 日本産食材については、料理メニュー等において、日本産である旨の表示があること。日本産酒類については、メニュー等において日本産である旨の表示があること。
	③顧客へのPR：接客等の際に日本産食材又は日本産酒類の魅力や特長をPRしていること。
海外の小売店	**①日本産食材・酒類の販売：**日本産食材・酒類を常に販売していること。 **②日本産食材・酒類の表示：**日本産食材・酒類を陳列している商品棚に、日本産である旨の表示があること。 **③顧客へのPR：**日本産食材・酒類の魅力や特長をPRしていること。

◆日本産食材：日本国内で生産された農林水産物又は製造・加工された加工食品
◆日本産酒類：日本国内で製造された酒類

・認定期間は2年間
・満了後は確認後改めて認定

Copyright © 2019 JETRO. All rights reserved. 禁無断転載


日本の農林水産省
ガイドラインを提示
相談・報告・提案
JETRO
日本貿易振興機構（ジェトロ）
海外事務所（55カ国74ヶ所）
日本国内事務所（44ヶ所）
① 申請
認定
② 指導・助言等
報告
認定団体（流通事業者など）
申請
申請
認定・サポート
サポーター店の認定・サポート
海外の飲食店・小売店
日本産食材サポーター店